

概観 正倉院宝物に見る刺繡美

切 畑 健
福 田 喜 重

はじめに

正倉院宝物における染織関係の、きわめて高度な内容と膨大な数に魅了されることは、いまさらあらためて述べるまでもない。まず重厚で華麗な錦、絹ならではの光沢の生きる綾、華やかであるに加えて平明な特色をうかがわせる三纈など、染織の種類によって、与えられる感動にそれぞれ特色のあることも、またあらためて言うまでもない。

そうしたあたかも百花の一斉に咲きそろうなかに、また刺繡の精華を見落とすことはできない。それは、刺繡自体、大声に発言するのではないが多様な染織美の要所を引き締める位置にあると思わせ、正倉院の染織美にある深さをそえていると考えさせるのである。

この調査報告では、正倉院宝物に見る刺繡の種類とその技術についてのあらましを述べ、次に現状外見上の特色に触れるに過ぎないが、繡糸について述べ、まとめとして正倉院刺繡の特色の一端を述べる。さらに項をあらためて、調査対象の各例についていささかならず煩雑と思えるが、調査の順どおり出来るだけ客観的に記述することに努力した。読者は調査員と歩調を同じくして正倉院刺繡のすばらしさを実感されるに違いない。そう念じている。

一、概観

(一) 刺繡の種類と技術

1、刺し繡(さしぬい)¹⁾

正倉院宝物に見る刺繡には、圧倒的と言えるほど、「刺し繡」の技法が用いられている。

刺し繡は、挿し繡ともいい、一つの文様を何段かに分けて面を埋め、やがて文様を完成する技法である。糸は比較的細目を用い、文様形象の中心に向けて、一針一針、文字通り刺し詰める。色を自由に变化させながら暈すことが出来、刺し糸のなびきによったり、糸の太さを变化させることによって、形象に豊かな立体感や生彩にとむ印象をあらわす。形象の輪郭では針目を揃え、その内側に刺し込む場合は針足に長短をつけ不揃いに繡い、二段目からは、一段目の長短のある針足の短い方の糸の中から針を出して、同様に針足に長短をつけて繡いすすむ。この反復の連続によって、やがて形象が糸で埋められる。この技法は現在でも、最も多く用いられており、繡技の特色から、動物の毛や鳥類の羽毛、草花の花や葉などの実在感表現に迫ることが可能で、写実的な成果の求められる場合には、きわめてふさわしい。さらに天象、風景などをさえあらわすことが自在である。

[極め刺し繻 (きめざしぬい)]

正倉院刺繻には、豊富な刺し繻が見られるが、その変化の一つに極め刺し繻がある。

刺し繻が段を重ねて挿すにあたって、針足の長短を塩梅することによって、段の替わるのがそれほど明確ではない。むしろ明確でないことがのぞまれたと言ってもよいが、極め刺し繻は明らかに段の替わることをあらわそうとし、針目の線を揃えて針を出す、針足はやはり長短の処理とする。

2、鎖繻 (くさりぬい)

正倉院刺繻では、圧倒的な刺し繻の存在によって、鎖繻はあまり目立たないが、しかし思いがけない部分に用いられているのを見出して、感動することがある。西欧式の刺繻ではチェーンステッチとよばれるのが、全く同じか或いは変化形を示すもので、一般に盛んに用いられている。鎖状にあらわされるところからこの名がある。糸の進む方向に、針をひねるように廻して小さな輪を帛面につくりのせて一旦針をおろし、すぐその輪の中から針を表面に出す。この繰り返しによってあたかも鎖のような線が出来、並べて面が埋まって形象が完成する。絹の繻糸特有の平滑さや光沢を最大に活かしたともいえる刺し繻とは異なり、むしろ一種無骨ともいえるぎこちなさが特色の鎖繻は、しかし正倉院刺繻でも存在感豊かで刺し繻に混じて独自の効果を発揮する。例えば刺し繻による唐花文様の茎や、葉脈に用いられているのを見る。冒頭でも述べたが、予想しない部分に見出す一例をあげれば、刺繻調査対象品目5「刺繻羅帯」の小さな割付菱文様の縁や×形の割り繻線、菱の内の繻詰めなどに見られる。また15「花喰鳥文刺繻残欠」では、中心となる花喰鳥の瞳の縁取りや眼窠が鎖繻で埋められているなどである。

なお以上述べた鎖繻は、いわば「本鎖繻」とでも名づけるべきもので、別に「割り鎖繻」とよぶのがふさわしいと考えられる場合がある。これは針に糸を二本通し、米粒のような形を帛面にあらわし、帛下から針を粒の中央に糸を割って出し、あたかも鎖繻によったように見せるものである。正倉院の鎖繻は、主として後者の場合が通例のようである。

3、纏い繻 (まついぬい)

別にまとい繻、まつり繻ともよばれる。フランス刺繻のラインステッチと同様で、共に線の表現にふさわしく、最もよく用いられる。返し繻の一種で、針目の途中から針を出して先に進み線をあらわす。その時に針足の角度を変化させてあたかも纏うように繻い、おのずから例えば唐草の曲線が生み出される。糸の太さを変化させたり、二針立、三針立などの技法によって、さまざまな線の表現が可能である。纏い繻の場合は、平糸処理が通例で、平糸ならではの光沢が生命である。しかし技術の拙劣によって光沢が落ちる。すなわち、針をおろす時に針をねじる癖のある場合は自然に糸に不用意な擦がかかることとなり、それが光沢を減じさせるのである。単純な技法であるだけに基本が重視されることとなる。正倉院刺繻の場合は、こうした点に気づく事はなかった。

4、平繻 (ひらぬい)

平面を繻糸で埋めるのに、繻糸が重ならないように並べて繻い詰める。それを地引繻 (じび

きぬい)ともいう。糸のわたりの短い場合はそのままにしておかれるが、長い場合は何らかの技法で平繻を押さえるのが通例である。例えば一本毎に別の細糸で斜めに押さえたり(切り - 霧 - 押さえ) 葉なら葉脈で繻い押さえたりする。

5、両面刺繻(りょうめんししゅう)

正倉院の刺繻では、両面刺繻(両面繻)の例をしばしば見出す。帯・幡などでいずれもその用途上、表裏のどちらからも同じように見えなければならぬ必要から採用されたものである。その都度ふさわしい工夫をこらした針づかいも特殊で、糸づかいもまた表裏を感じさせないという、独自の繻法に習熟しなければならない。

6、芥子繻(けしぬい)

正倉院刺繻には、多くはないがきわめて効果的に処理された数例を見出す。文字通り芥子粒に見まがうばかりの小点をあらわしたもので、光沢を失うことなく、よくそろってしかも極力小さく繻うというのは、単純で最も基本的な技術ながら、優秀な手を必要とする。正倉院の場合は単独で用いられることは少ない。例えば3「刺繻襦袢残欠」の遊鳥山水文様における、洲浜部分には、刺し繻で洲浜を形成し、多色系で芥子繻をその上に散らしのせる。また15「花喰鳥文刺繻残欠」では花喰鳥の鶏冠部分で、刺し繻で地を繻いあげた後、その上に芥子繻を施すなどとする。刺し繻など下地繻の上に施すわけで、色彩への配慮はいうまでもなく、さらに糸の光沢によってその効果を発揮し、作品全体が成功することとなる。

7、駒繻(こまぬい)

駒(刺繻用の木製糸巻の一種)に巻いた、一般に針穴に通せない糸、すなわち太い金銀糸、唐燃糸などの特殊な細工の糸などを、帛面に繻いあらかず技法。例えば一本づつ金糸を巻いた駒二個を生地の上に這わせるように伸ばし、その二本の金糸を別の細糸を用いて、一定の間隔で生地に綴じ付ける。駒二個(金糸二本)を一駒繻(ひとこまぬい)とし、駒一個(金糸一本)を片駒繻(かたこまぬい)とよぶ。金糸を詰めるように綴じつけて金色の面をあらわす場合と、一駒繻や片駒繻で線をあらわす場合などが見られる。正倉院の駒繻にはその双方がうかがえる。15「花喰鳥文刺繻残欠」では花喰鳥の嘴や爪に駒繻詰が行われている。また各種の道場幡には片駒の縁飾りが施されている。13「羅道場幡頭刺繻残片」では銀糸を片駒で用いて、きわめて特殊な綴じ方をしめしている。

8、紹刺し繻(ろざしぬい)

この繻は織物の紹や紗などを用いて、糸密度の低いことや、特殊な組織によって出来た織目の空隙を利用して文様を繻いあらかず。その空隙を数えつつ、文様に従って上から下へ糸を渡して、表面にのみ糸を詰めて、文様を完成する。今回の調査では、上記のような全くの紹刺し繻ではないが、織の地の目を拾うようにして糸をわたした一見紹刺し繻風の特徴をしめすものが見られた。10「吉字刺繻飾方形天蓋残欠」で、その短辺側の水引の一部に採用されている。ここでは紹地ではなく六つ入りの箄目のある平組織の密度の低い裂地で、経六本入りの箄目と箄目のかなり広い間隙を拾って、紹刺し繻風の文様形成の基本となっている。しかし紹刺し繻

と異なって、繡糸が緯（よこ）に処理されるのも特殊である。

9、各種繡

[網代繡（あじろぬい）]

網代を組むように、左右の両縁から中心に向かって交互に刺しおろして線を繡いあらかす。正倉院刺繡では、唐花の葉中心の葉脈や、茎を繡う。

[返し繡（かえしぬい）]

正倉院刺繡では二種の返し繡がみられる。一は10「吉字刺繡飾方形天蓋残欠」の吉字やその枠の部分で、針を裏におろして、次に表面の糸に沿ってわずかに返った箇所からあらためて針を出し、さらに先に繡いすんで線を伸ばす。この繡線を内に詰めて形象（吉字・枠）が出来る。二は13「羅道場幡頭刺繡残片」の松樹にまきかかる藤蔓など、専ら細い線繡処理の場合である。

[廻転繡（かいてんぬい）]

きわめて特殊な繡で仮にこの名でよんだものである。10に見られて、吉字や枠をあらわすのに、針をおろしてそのまま裏面をまわり一廻転するように表面に針をあげる。その繰り返して面（吉字・枠）をあらわす。したがって裏面にも表面とほぼ同様の形象があらわされている。

（二）繡糸

ここでは繡糸の外見上の特色を述べることにする。繡技において刺し繡が圧倒的に数多く見られたのと同様に、繡糸では無撚りの平糸が中心となる。絹糸の光沢を生かす刺し繡に平糸がふさわしいのはいうまでもない。

また主として二色を撚り合わせて、色目や質感に変化をもとめた空糸（もくいと）が、かなり積極的に用いられているのにも大いに注目されるところで、しかもその効果についての十分な認識がゆきとどいているのもいうまでもない。その例として13「羅道場幡頭刺繡残片」で、仮に松竹景とよぶ例を見る。文様の中心の一つである松樹の幹に旺盛な空糸づかいが見られる。よじるような樹幹の根方から梢へ七区に分けて空糸が用いられている。紫と白茶、白茶と茶、黄緑と淡茶、淡緑と紫、白茶と茶、白茶と紫、白茶と紫の空糸で、これらが刺し繡であるのは意表をつく。これらはまた針そのものの様子をも興味深く考えさせるものであるといえる。

また諸撚糸が用いられていることも特徴の一つである。諸撚糸は同色二本の同じ撚り方の撚糸を用意し、次にそれを合わせて逆撚りとして一本にしたものである。10の吉字と枠・地の部分をすべて諸撚糸で詰めるが、その独特の堅固な趣が生かされている。さらに同じく「小髷舟形繫ぎ」の幅狭い水引部分も繊細な施工ながら諸撚糸の確かな手答えが効果的である。

（三）特色

以上述べたように正倉院の刺繡には注目すべき点が多々あることがうかがわれた。ここではそれらをいまいちど振りかえったり、あらためて考えたりしながら、「特色」としてまとめるこ

ととする。

正倉院の刺繍には上述のように圧倒的と称してよいほど刺し繍が用いられていた。以下はわずが三例ではあるが、あらためてとりあげ、刺し繍がその場でどのようなことを発言し、どのような成果をしめすのかを確かめたい。

3「刺繍褥残欠」は仮に遊鳥山水と名づけた文様を鏡の部分にあらわした褥で、壮大な山水の世界である。松樹生うる島山はあたかも仙山を想起させ、水鳥の遊ぶのどかさ、漁る人物は仙人で、全体に吉祥感あふれる仙境をあらわすのであろう。その広大な空間を刺繍で表現することは、一般的にいえばきわめて困難と考えられ、後世の作品にも思い出す例はほとんどない。

島山 頂部を淡色とし、中心に向かうにしたがって緑を濃くする。それは島山の樹相をとらえ、刺し繍特有の動勢にとむ糸運びは、また樹々の生気の旺盛さを再現する。あるいは岩山かと見れば、奥深くえぐれているような峻厳さを感じさせる。

鳥 飛鳥にしる浮かぶ遊鳥にしる、きわめて小さな体躯を丹念な刺し繍が、それぞれ舞いおりたり、水面に体を起こすようにして羽ばたく様子をあらわす。

舟上の人物 かぶり物を着けた白衣姿を刺し繍が細かくとらえている。

魚 鳥に追われて深みに潜ろうとする姿、刺し繍が魚の動きに方向性を与えているようである。さらに刺し糸の上に鱗や背鰭を繡いのせ、目、口などさえあらわす。

洲浜 圧観は、現状では二ヶ所に見られる洲浜である。刺し繍はきわめて力動感にとみ、洲浜に生うる樹木の枝のなびきをしめすのであろうか、諸方に向かってはげしく伸び、乱れ、やがて中心部にまとまっておさまる。いずれにも番いの水鳥が左から右へ歩くのがほほえましい。

15「花喰鳥文刺繍残欠」。想像上の鳥である鳳凰を、あたかも実際に存在する鳥のように、写実的にとらえ、刺し繍の効果を最大に生かした作例である。重ねた雨覆羽や風切羽、華麗に宝相華の花先や葉先形に装飾化いちぢるしい尾羽などを、濃やかに区切ってそれぞれを刺し繍であらわし、埋め尽くす。色の変化は量綱彩色の基本が踏襲され、必ず中心に濃色、あるいは思い切った補色関係を導入するなど、各部形象の中心の存在を強調するので、あふれる色彩の処理に確かな統一感が得られることとなる。色彩美にさらに付加される抜群の効果が指摘できる。それは絹糸特有の光沢である。そしてそれこそが刺し繍の最も得意とするところで、形象各區画のそれぞれの傾きによって、常にその中心に収斂する繡糸の傾斜が異なり、いわば乱反射の効果が生じるのである。それはまた動きを十分に考慮して描かれた形象にいつその生彩をそえ、花喰鳥が生命を得て歩き出すかのようであり、豊麗な尾羽は絶妙の羽ずれの音とともに揺れるように思わせる。繰り返すが、ここでは刺し繡ならではの効果がうかがえるのである。

12「羅道場幡頭刺繍残片」。ここでは写生的でない、割り付け文様をうかがう。幡頭の三角形を左右対称に唐花と唐花の枝で構成する。きわめて装飾的に完成した花や葉は、いずれも刺し繡を数段重ねてあらわされている。花は花芯に向かって針をおさめ、葉も中心葉脈から茎軸に針をすすめおさまる。先述したように各部分の刺し繡は、花や葉に複雑な光沢をそえることとなり、左右対称という固定された空間が小刻みに動いているように感じさせるのである。さら

に刺し繻はいまひとつ刺し繻ならではの特色をしめしている。すなわち唐花という想像上の植物であり、しかもここでは写生をはなれ、装飾化された割り付け表現という世界ながら、花や花枝などはいずれもそのもとから、豊に水分を吸いあげて、今を盛りに咲きほこっているともいえる趣を感じさせる。それは現実感を尊重し、その為に写生や写生的表現を重視する考えの存在をよくうかがわせている。

わずか三例ながらこれらから刺し繻の特色の一端がうかがえたのではないだろうか。いうまでもなく正倉院の刺繻は刺し繻ばかりではない。中心となる刺し繻による華麗な表現の一方に細部をおろそかにしない繊細な施工の存在に注目すると、そうした点に刺し繻の効果をいっそうきわだて、支えるかのような刺し繻以外の諸技を見出すのに全く感動されるのである。それぞれの繻技の効果が熟知され生かされているのである。又それは、気宇の壮大さと細部を見つめ、いとおしむかのような繊細さとの調和と言いかえてもよいであろう。

あたかもそこに生きて存在するような、きわめて生彩にとむ写生的表現は、周知のように唐代の造形の諸般に共通のものである。唐代の刺繻はほとんど残存する例を見出せないが、ニューデリー国立博物館蔵のスタイン・コレクション中の花鳥文様刺繻裂(スタイン番号ch.00281)は、大いにやつれているが、刺し繻風の繻技によることが報告されている。⁽²⁾ 図版によればまさしく現存する部分の文様はすべて刺し繻で、繊細な花鳥文様が紅糸もあざやかに繻いあらわされていたことが知られる。しかもこれは花や飛鳥が写生的にとらえられ、刺し繻がその表現にふさわしかったのである。今は失われてしまった唐代の刺繻美を、正倉院の諸例が教えているのである。

豊富な水分を得て、おおらかに枝葉を伸ばし、輝くような色彩と香気をあたり一杯にして咲きほこる、正倉院の刺繻は、この期ならではの刺し繻の完成とその活用を措いては語ることはできない。

註1 刺繻技術については、

福田喜重「刺繻の技術」(『染織の美』9昭和五十六年二月 京都書院)参照。

註2 山辺知行『スタイン・コレクション ニューデリー国立博物館蔵 シルクロードの染織』(昭和五十四年紫紅社)図104刺繻裂(花鳥模様)スタイン番号ch.00281

二、正倉院刺繻調査報告

1 繻線鞋(北倉152 第1号・2号) (全姿図1)

【概要】第1・2号ともに鞋先の立体的に成形された花形装飾の部分にのみ刺繻が施されている。刺繻のある花形装飾は、下地裂ごと別に用意され、全体を構成し、最後にとりつけ飾られたものと考えられる。なお墨下絵が露出しているものがある。

【繻文】唐花【下地裂】粗平織布

【部位1】第1号 鞋先正面 吹寄蓮台風構成の花弁重ね文(口絵1)

《繡糸》平糸《繡技》刺し繡5段 - 上方から淡青・黄
・極淡紅・淡紅・橙

【部位2】第1号 鞋先上面中心の突起 全花形六弁花
(口絵2)

《繡糸》平糸《繡技》刺し繡、花の中心から外に向け
て刺す。4段 - 中心から橙・淡橙・淡黄・淡青。

【部位3】第2号 鞋先正面 吹寄蓮台風構成の花弁重
ね文(挿図1)

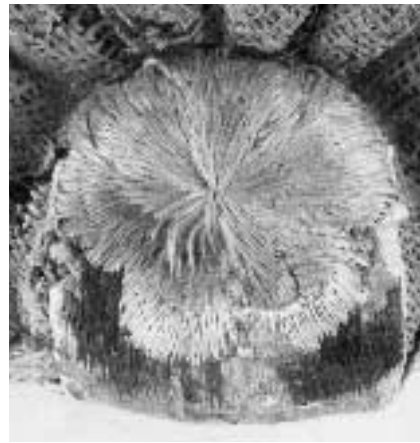
《繡糸》平糸《繡技》刺し繡15段。

【部位4】第2号 鞋先上面中心の突起 全花形六弁花
(挿図2)

《繡糸》平糸《繡技》刺し繡。中心に棧俵繡(さんだ
わらぬい)風の針づかいによる施工を加える。中心
部分の陥没を避け、さらに見栄えよくする効果があ
る(挿図3)。



挿図1 繡線鞋(北倉152-2) 爪先の正面



挿図2 繡線鞋(北倉152-2) 爪先の上面

2 紫皮裁文珠玉飾刺繡羅帯残欠(中倉95)

(全姿図2)

【概要】絹綿を芯に複雑な構成になる袷仕立ての帯。表
側のみ全体に連続文を繡う。6ヶ所に紫鹿革によるパル
メット裁文が縁かがりとじ切付であらわされているのが
残存している。なお帯の下縁となる側に数個の珠を連ね
た垂飾が残存する。

【繡文】五弁花入り連珠襷。【下地裂】文羅(茶褐色)。その下の茶褐
色糸とともに二枚重ねの下地裂とする(挿図4)。

【部位1】五弁花(挿図5)

花弁《繡糸》平糸《繡技》刺し繡3~4段。外から内へ、花芯に

向かって刺す。紫系色花 - 淡紫・濃紫・白。ただし淡紫の外に白の加わることがある(紫
の破損脱落のはなはだしいものは茜の鉄媒染によると考えられる。他はすべて紫根染)。
赤系色花 - 白・赤・紫・白。紅系色花 - 白・紅・紫・白。

《配色と繡》同色の花は1針で繫いで繡う。裏側にまわった糸浮がみとめられる。同色花を
上下一対として揃える。(口絵3・挿図6)

《備考》花弁の刺し繡には「キメル(極る)」ことが行われていて「キメザシ(極め刺し)」
とよぶ。すなわち、花弁の縁を明確とする為に針目をそろえ、第二段は第一段(最外花弁)
の1針の糸を割って針を出し、内に向かって刺す。芯に向かって刺しすすめるにつれて針



挿図3 棧俵縫風

数を減じる。ただし後世では糸を細くして針数をそろえることが考えられた。

花芯 《繡糸》平糸《繡技》平繡。数針を並べるが、×形に繡う場合がある。

【部位2】連珠襷

《繡糸》平糸《繡技》地裂の経緯に対して斜め方向に刺す。辻珠は主として↘方向に繡う。すなわち連珠↘方向繡にふくまれる。糸はすべて裏にもまわり、したがって表裏に連珠が見られる。

【部位3】パルメット裁文 紫鹿章 諸燃糸を用いて縁かがり繡で切付ける(挿図7)。

3 付属刺繡襷残欠 刺繡残片(中倉95)
(全姿図3)

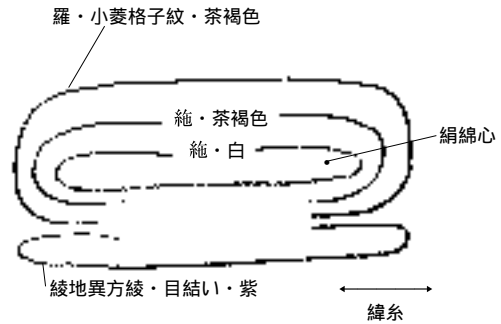
【概要】 絹綿を芯にした襷で、鏡の部分には長辺の左右から鑑賞する山水図が刺繡であらわされている。破損欠失の部分が多いが当初のひろびろとひろがる水面と山や巖、水鳥からなる風景表現の大きな気分は充分にうかがえる。また諸景物の繊細な繡処理も大いに注目される。今回調査の各部分の検討はおおむね襷の左から右におよぶ。なお額の一隅に唐花文繡が残存するが、その繡技は鏡部分の山水繡とは手を異にし、比較するといささか拙劣と思える。

【繡文】遊鳥山水【下地裂】鏡 - 白羅(下にそえた白糸と共に繡う)。額 - 茶羅(下にそえた茶糸と共に繡う)。

【部位1】岩山(挿図8・9)

岩山 《繡糸》平糸《繡技》刺し繡 - 5~6段、外から内に刺す。緑・淡緑・黄・橙。最外を紫の纏い繡で縁取る。中心の橙糸は太め。

樹木 《繡糸》平糸《繡技》幹 - 纏い繡。



挿図4 紫皮裁文珠玉飾刺繡羅帯残欠(中倉95)の仕立て図



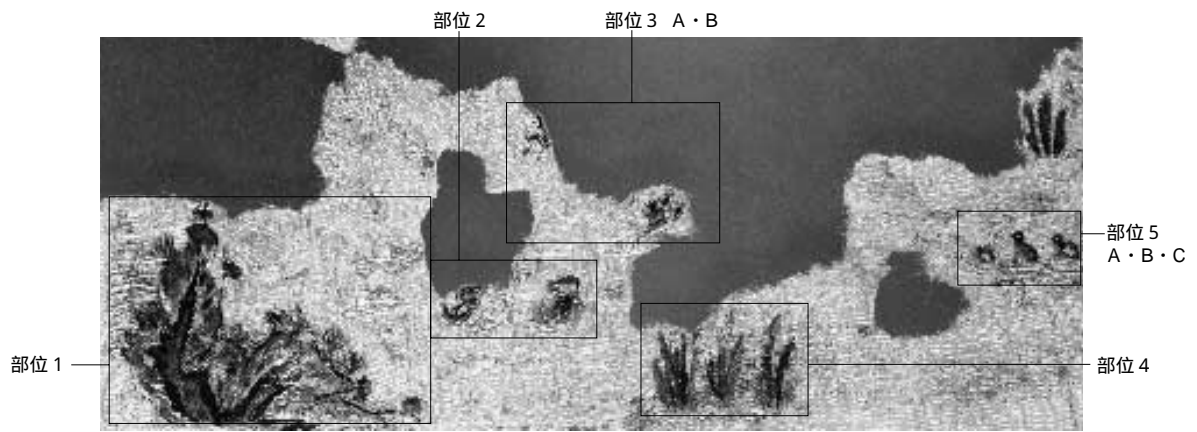
挿図5 紫皮裁文珠玉飾刺繡羅帯残欠(中倉95)
五弁花・連珠



挿図6 文様の配色 同色を上下に揃える糸の渡り



挿図7 紫皮裁文珠玉飾刺繡羅帯残欠(中倉95)
パルメット裁文



挿図8 刺繡襦袢残欠(中倉95)襦の左側



挿図9 刺繡襦袢残欠(中倉95) 部位1



挿図10 刺繡襦袢残欠(中倉95) 部位2
雄(右)・雌(左)



挿図11 刺繡襦袢残欠(中倉95) 部位4

方向性なく自由。枝 - 纏い繡。葉 - 1針の纏い繡。樹幹を中心に枝は左右で纏い方をS・Z方向と異にし、光沢の変化する効果が意図されている。

【部位2】鴛鴦(挿図10)

雄《繡糸》平糸《繡技》嘴 - 2針刺し。紫色の跡がある。胸・胴 - 刺し繡。目 - 纏い繡。白糸で六角形に刺す。目の中心は紫糸で一文字に表した形跡がある。

雌《繡糸》平糸《繡技》胸・胴 - 刺し繡。他は欠失不明。繡糸の色を雌雄で細やかに変化させている。

【部位3】飛鳥

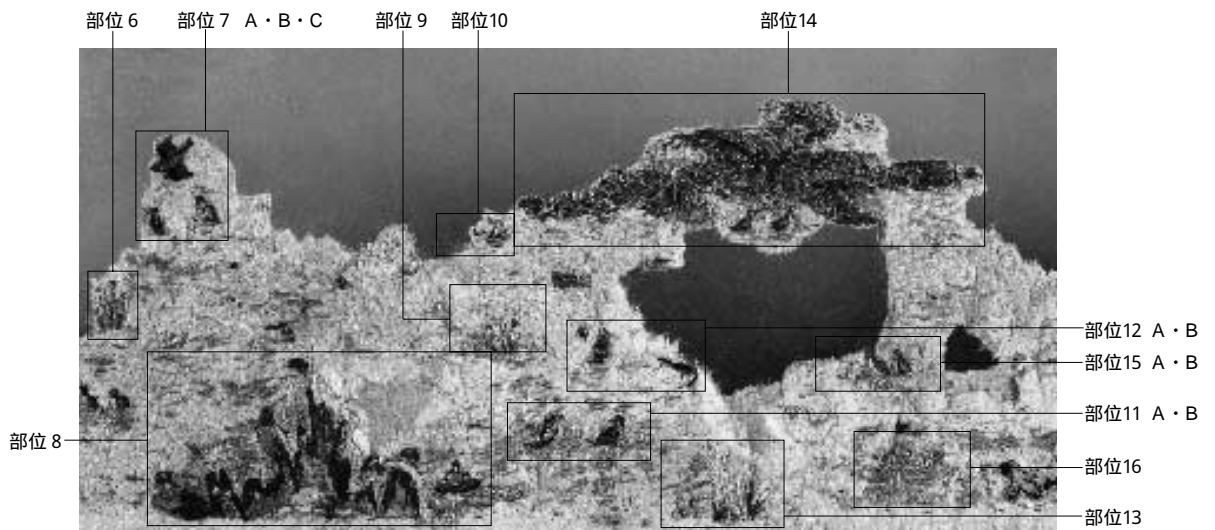
飛鳥A 《繡糸》平糸《繡技》翼 - 極め刺し繡。飛ぶ初動作か、欠損多い。

飛鳥B 《繡糸》平糸《繡技》刺し繡。右斜め上方に向かって飛ぶ様子

【部位4】水辺草(挿図11)

《繡糸》平糸《繡技》纏い刺し繡。それぞれの草叢の中心に向かって刺す。黄(濃、淡)・淡茶・緑(濃、淡)・青。微妙なぼかしの効果を目ざす。

【部位5】水鳥



挿図12左 刺繍襦袢残欠（中倉95）襦の中央

水鳥A 《繡糸》平糸《繡技》身 - 刺し繡。欠損多い。

水鳥B 《繡糸》平糸《繡技》身 - (刺し繡)。目 - 1針繡。

水鳥C 《繡糸》平糸《繡技》身 - 刺し繡。目 - 1針。

特にB・Cでは紫糸をそえて、纏い繡で強調点を表現する。また仕分けの効果がある。針目が細かい。

【部位6】水辺草（挿図12 左）

《繡糸》平糸《繡技》纏い刺し繡

【部位7】水鳥（口絵5）

飛鳥A 《繡糸》平糸《繡技》胴 - 刺し繡3段。翼 - 刺し繡3段。紫の劣化は茜の鉄媒染によると考えられる。

水鳥B 《繡糸》平糸《繡技》胴 - 刺し繡。周囲を紫糸で縁取る - 纏い繡。ただし、これは全体に加わるのではなく、仕分けの効果を目ざして、部分的である。

水鳥C 《繡糸》平糸《繡技》胴 - 刺し繡。欠損多い

【部位8】岩山（口絵4）

岩山（口絵4 左）

岩山《繡糸》平糸《繡技》刺し繡。外から内へ刺す。4～6段。樹 - 《繡糸》平糸《繡技》幹 - 纏い繡・1針繡か2針繡。樹木の葉 - 1針繡。幹先端を中心として放射状に刺す。草《繡糸》平糸《繡技》1針繡を3針で▽形とし、山肌に散らすように刺す。

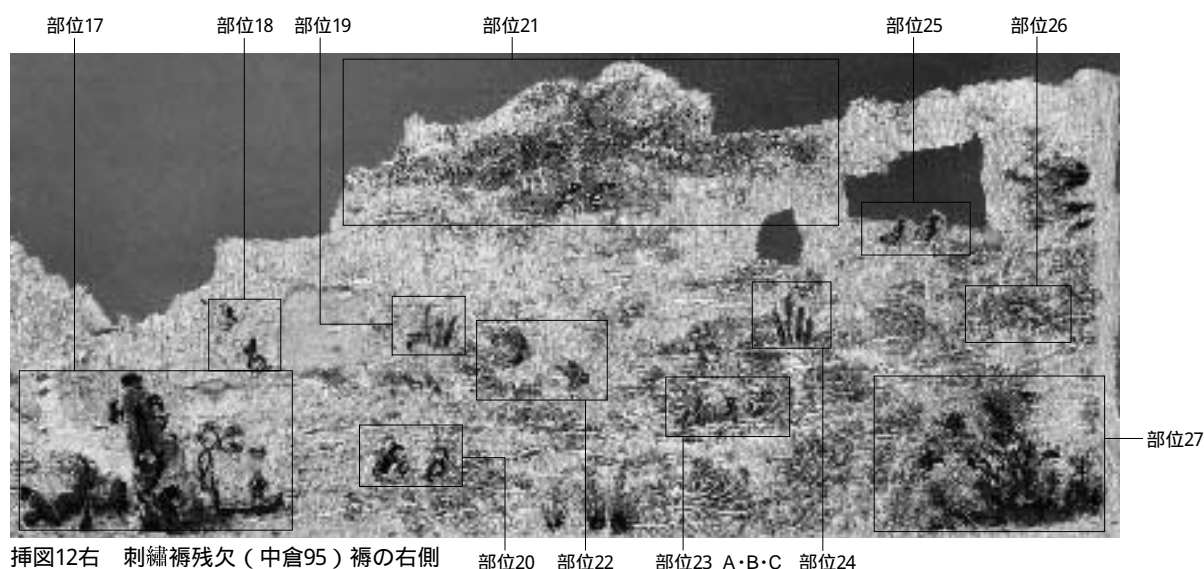
舟上の人物（口絵4 右）

舟 - 《繡糸》平糸《繡技》刺し繡。輪郭を縁取る - 纏い繡。人物 - 《繡糸》平糸《繡技》刺し繡。緑糸で仕分けする - 纏い繡。かぶり物を着けた白衣姿を細かに表現している。

【部位9】水辺草

《繡糸》平糸《繡技》纏い刺し繡。

【部位10】飛鳥。左下に向かって下降する様子。



《繡糸》平糸《繡技》胴 - 刺し繡。霜降り状に表現。足 - 纏い刺し繡。

【部位11】鴛鴦

雄A 《繡糸》平糸《繡技》刺し繡。ほぼ4色の糸による。紫糸でわずかに仕分する - 纏い繡。

雌B 《繡糸》平糸《繡技》刺し繡。紫糸で縁取る - 纏い繡。ただし全体ではなく仕分け効果を目ざし、部分的に加える。

【部位12】飛鳥

飛鳥A 《繡糸》平糸《繡技》胴・翼 - 刺し繡。断続的に纏い繡を加えることで力動感を表現する。

飛鳥B 《繡糸》平糸《繡技》胴・翼 - 刺し繡。

【部位13】水辺草

《繡糸》平糸《繡技》纏い刺し繡。

【部位14】洲浜（挿図13）

洲浜 《繡糸》平糸《繡技》全体を刺し繡で形をととのえ、さらに多色の芥子繡を散らすように繡いのせる。刺しの方向は諸方に向かっているが、全体としては中心に集束する。蓬莱山など神仙の島をあらわしたもののか。

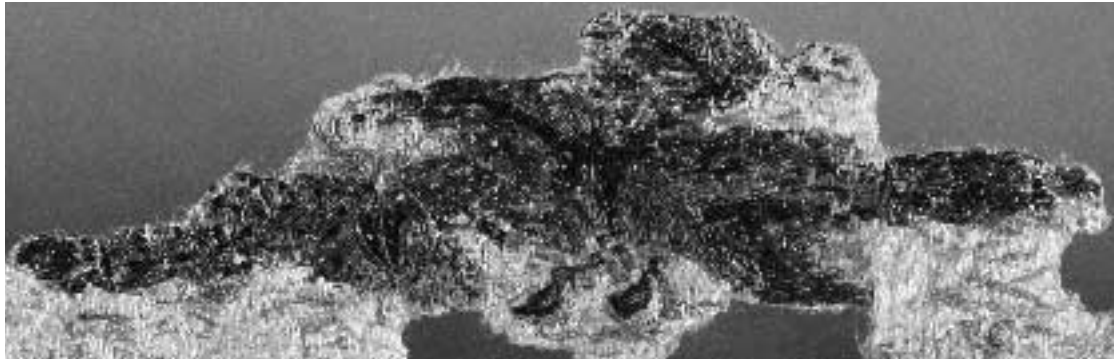
遊鳥 《繡糸》平糸《繡技》胴 - 刺し繡。強調点や仕分けの効果を目的として、纏い繡を加える。目 - 1針繡。

【部位15】水鳥

水鳥A 《繡糸》平糸《繡技》胴 - 刺し繡。強調点や仕分けの効果を目的として、纏い繡を加える。

水鳥B 《繡糸》平糸《繡技》胴 - 刺し繡。強調点や仕分けの効果を目的として、纏い繡を加える。目 - 1針繡。

【部位16】水波（挿図14）



挿図13 刺繡襦袢残欠（中倉95）部位14

《繡糸》平糸《繡技》纏い繡。S・Z方向を刺し分ける。いずれもよく手なれている。刺し分けることによって糸の光沢の変化から、波に動きがうかがえる。



挿図14 刺繡襦袢残欠（中倉95）部位16

【部位17】岩山（挿図12右・挿図15）

岩山 山《繡糸》平糸《繡技》刺し繡。山頂の草《繡糸》平糸《繡技》刺し繡。
樹木《繡糸》平糸《繡技》。
樹木の幹 - 纏い繡・1針か2針繡。樹木の葉 - 1針繡 - 部位8の葉繡に同じ。
立木《繡糸》平糸《繡技》
幹 - 纏い繡。葉 - 放射状に刺す - 刺し繡。



挿図15 刺繡襦袢残欠（中倉95）部位17

舟上の人物 舟《繡糸》平糸《繡技》刺し繡。紫糸で縁取る - 纏い繡。人物《繡糸》平糸《繡技》蓑 - みだれ刺し（やたら繡）。足 - 纏い繡・1針か2針繡（口絵6）。

【部位18】飛鳥・魚（挿図16）

飛鳥《繡糸》平糸《繡技》刺し繡。降下し魚を追う姿。
魚《繡糸》平糸《繡技》刺し繡。刺繡の上に鱗を繡う。縁取りを加える - 纏い繡。鱗や背鰭など細部にまで手がこむ。鳥に追われて潜る姿を表現する。

【部位19】

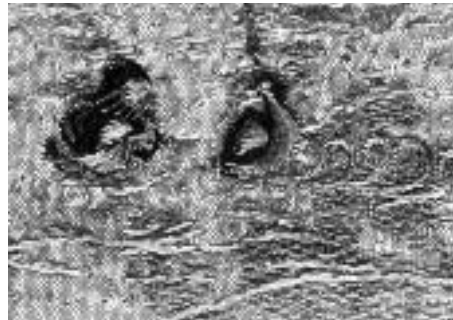
水辺草《繡糸》平糸《繡技》纏い刺し繡

【部位20】鴛鴦（挿図17）

雄《繡糸》平糸《繡技》胸・胴 - 刺し繡。頭に縁取りを加える - 纏い繡。飾り繡・1針繡など細部に手がこむ。
雌《繡糸》平糸《繡技》胸・胴 - 刺し繡。赤糸で縁取る - 纏い繡。後方をふり返る姿を表現する。



挿図16 刺繍襦袢残欠（中倉95）
部位18



挿図17 刺繍襦袢残欠（中倉95）部位20



挿図18 刺繍襦袢残欠（中倉95）
部位26

【部位21】洲浜（口絵7）

洲浜 《繡糸》平糸《繡技》刺し繡で形成し、多色の芥子繡を散らしてのせる。刺し繡は諸方向に向かうが、最終は中心に集束される。縁取りを加える - 纏い繡。蓬莱山など神仙の世界を表現したものか。

遊鳥 《繡糸》平糸《繡技》胸 - 刺し繡。目 - 1針繡。強調点や仕分けを目的に纏い繡を加える。

【部位22】飛鳥

飛鳥 《繡糸》平糸《繡技》胴・翼 - 刺し繡。断続的に纏い繡を加えて力動感の表現を目指す。

【部位23】水鳥

水鳥A 《繡糸》平糸《繡技》胴 - 刺し繡。強調箇所や仕分けを目的に纏い繡を加える。

水鳥B 《繡糸》平糸《繡技》胴 - 刺し繡。目 - 1針繡。

水鳥C 《繡糸》平糸《繡技》胴 - 刺し繡。強調箇所や仕分けを目的に纏い繡を加える。

【部位24】水辺草

《繡糸》平糸《繡技》纏い刺し繡。

【部位25】水鳥

水鳥 《繡糸》平糸《繡技》胴 - 刺し繡。強調箇所や仕分けを目的に纏い繡を加える。

【部位26】魚（挿図18）

《繡糸》平糸《繡技》刺し繡。刺し繡の上に鱗を繡う。縁取りを加える - 纏い繡。目・口 - 1針繡。鱗や目など細部の表現に手がこむ。

【部位27】岩山

岩山 《繡糸》平糸《繡技》刺し繡。外から内へ繡う。

樹木 《繡糸》平糸《繡技》幹 - 纏い繡・1針か2針繡。葉 - 1針繡。幹先を中心に放射状に繡う。

4 間縫刺繡羅帯残欠（中倉104）（全姿図4）

【概要】蘇芳色糸を芯とした、特殊な袷仕立てによる羅帯。全体に唐花唐草と含綬鳥を交互とした文様を繡う。この調査ではその各部分を取りあげて特色を述べるが、先に全体にわたる注

目点をまとめておこう。

- 1、両面刺繡(表裏裂と芯裂と、三枚重ねて繡う)。
- 2、現状が刺繡の表面である(理由:「下絵のある面が表である」との前提に立てば当宝物の場合、現状羅表面に白色顔料による白線下絵がみとめられる)。
- 3、金銀泥を用いて、雲・鳥・蝶・蔓草・綬などを羅地に描絵加飾する。
- 4、繡技はきわめて優れていて、仕上がりがよくととのっている。
- 5、よくととのった仕上がりに関しても、さらに現状表面が、本来の表面であることが確かめられる。すなわち一般に「出す針よりも、収める針の方が綺麗にまとまる」とされ、この場合も裏面から針を出して繡い始め、やがて表から裏に針を収めて繡い終わっているのが認められる。

【繡文】唐花唐草含綬鳥

【下地裂】文羅(褐色)芯の蘇芳色纒と表裏羅裂と三枚重ねて繡う(挿図19)。

【部位1】端飾り

《繡糸》平糸《繡技》両面刺繡。(挿図20)

葉 刺し繡。茶糸は4段・緑糸は3段の暈網風。針の刺し進め方は先端の尖った部分より左右に繡い分け、最終針線に及ぶ。緑糸の2・3段目には捨針の可能性があり(挿図21)。

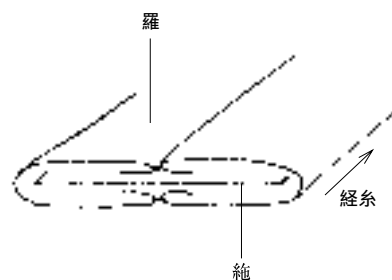
【部位2】花喰鳥

《繡糸》平糸《繡技》両面刺繡(挿図22)

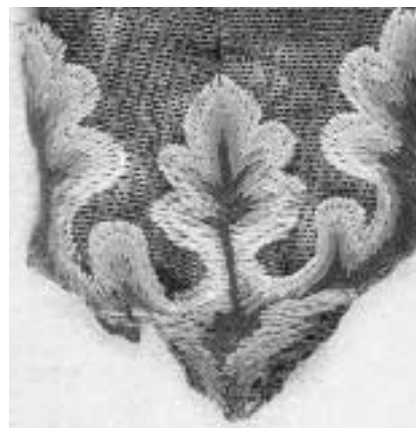
鳥 頭 - 刺し繡、暈網風。胴 - 刺し繡3段。尾 - 刺し繡2段。翼 - 刺し繡3段、雨覆羽は細く、根元の焦茶糸欠失。風切羽先端は糸太く、部位によって糸の太細を用い分けている。嘴 - 纏い繡。脚 - 鎖繡。

葉 割繡。

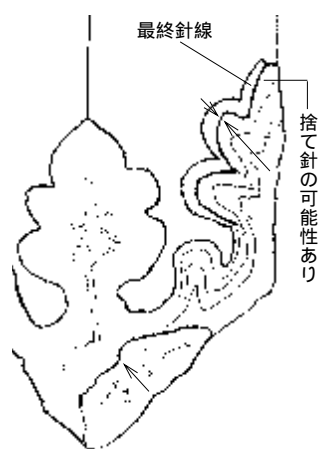
茎 纏い繡。茎は繡糸を白・緑に変えるだけでは無く、茎の曲節で繡い方を変化させ(右纏い



挿図19 間縫刺繡羅帯(中倉104)の仕立て図



挿図20 間縫刺繡羅帯(中倉104)部位1



挿図21 針の刺し順



挿図22 間縫刺繡羅帯(中倉104)部位2

左纏い) 微妙な光沢の変化を生じさせている。

【部位3】団花 《繡糸》平糸《繡技》両面刺繡(挿図23)

全花形 花弁 - 刺し繡 5 段。内から外へ刺し進める。
ただし 5 段目は外から内へ、外郭をキメ(極め)てとのえる。花芯は平繡風に短く糸を並べた臍繡いで処理。
半花形 花弁 - 刺し繡 3 段。萼 - 刺し繡。
葉 3 枚 割り繡。
蕾 刺し繡。
茎 鎖繡。

【部位4】花喰鳥 《繡糸》平糸《繡技》両面刺繡(挿図24)

鳥 頭 - 刺し繡、暈網風。胴 - 刺し繡 3 段。肩辺に黄色顔料等の彩色のように見える箇所がある。繡後の補彩か。尾 - 刺し繡 3 段。翼 - 刺し繡 3 段。嘴 - 纏い繡。
目 - 1 針繡、白糸。
花 花・蕾 - 刺し繡。茎 - 纏い繡。

【部位5】蔓唐花 《繡糸》平糸《繡技》両面刺繡(口絵8)

花 全花形 - 刺し繡 3 段。内から外へ繡う。ただし 3 段目(最外)は外から内へ。芯 - 臍繡。半花形 - 刺し繡 3 段。萼 - 刺し繡。
葉 刺し繡 3 段と割り繡による。
茎 鎖繡。

【部位6】花喰鳥 《繡糸》平糸《繡技》両面刺繡(挿図25)

鳥 頭 - 刺し繡、暈網風。胴 - 纏い繡と刺し繡 3 段。
尾 - 刺し繡。翼 - 刺し繡 3 段。脚 - 鎖繡。嘴 - 纏い繡。
目 - 1 針繡。
花 葉 - 割り繡。茎 - 鎖繡。

翼の肩部分、蕾など繡糸の欠失した箇所に、羅地に下絵を下描きした白線が確認出来る。

【部位7】金・銀泥による描繪

羅地刺繡の後、金銀泥絵加飾。例 - 瓔珞(金泥) 萩葉風の葉(銀泥)など。

【部位8】含綬鳥 《繡糸》平糸《繡技》両面刺繡(口絵9・10)

鳥 頭 - 欠失。胴 - 欠失。尾 - 刺し繡 3 段。翼 - 刺し繡 3 段。嘴 - 纏い繡。
綬 珠 - 平繡と刺し繡。綬 - 刺し繡。細い箇所は纏い



挿図23 間縫刺繡羅帯(中倉104) 部位3



挿図24 間縫刺繡羅帯(中倉104) 部位4



挿図25 間縫刺繡羅帯(中倉104) 部位6

繡、端は刺し繡。2段2色。

5 刺繡羅帯（中倉109）（全姿図5）

【概要】夾繡文様の羅を用いて、特殊な袷仕立てとした帯の全面に刺繡文様をあらわす（挿図26）。文様は三重の菱形を繋いで地とし、先合部に四弁花を菱中央に小四菱をそれぞれ一個ずつあらわした連続文様。先に全体にわたる注目点をまとめておこう。

- 1、両面刺繡（袷仕立ての表裏を重ねて繡う）
- 2、下絵の白色顔料が認められ、下絵のある側が表面。裏面には下絵はなく、現状が表面。
- 3、羅地繡の特色が、羅組織の織目穴に刺すことによってうかがえる。
- 4、多色の糸は、その都度切られている。鎖繡（割り付け部分など）の場合は糸を切ってもほどけにくい。
- 5、羅地繡を容易とするため、羅は先ず表裏を織糸と共糸で綴じ合わせてあるか。

【繡文】菱繋ぎに唐花【下地裂】夾繡羅

【部位1】端飾り 《繡糸》平糸《繡技》両面刺繡（口絵11）

両側 刺し繡4段。帯端（濃色）より内側（淡色）へ刺す。

中央 刺し繡3段。帯中心（濃色）より外側（淡色）へ刺す。

先端 刺し繡4段。両側繡と中央繡の配色に細やかな配慮が見られる。

【部位2】四弁花 《繡糸》平糸《繡技》両面刺繡（口絵12）

花弁 刺し繡2段、内から外の順に刺す。四弁の仕分けは外の糸を長くすることで処理する。花芯 - 臍繡。不規則に約3針繡う。

【部位3】菱縁・内筋 《繡糸》平糸《繡技》両面刺繡（挿図27）

一見纏い繡と見えるが、鎖繡。

【部位4】四菱 《繡糸》平糸《繡技》両面刺繡

現状三種の繡がみとめられる。

A 四菱内 - 鎖繡、埋めるように繡う。×形割付 - 纏い繡。芯 - 臍繡、不規則に約3針繡う。外郭 - 平繡。

B 四菱内 - 平繡、Aのように鎖繡で埋めるよりも光沢が勝る。×形割付 - 纏い繡で約5針。芯 - 臍繡、不規則に約3針繡う。外郭 - 平繡、菱形をよく引き立てる繡技といえる。

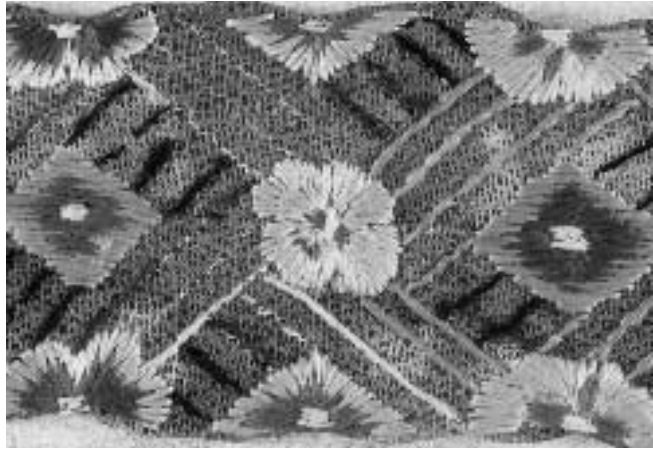
C 先頭から24個目以降の菱には×形割付が見られない。菱には捨て針を加えて肉入りの膨らみをあらわす。中に捨て針に被せた繡糸が欠失し、捨て針が露出しているものがある。《備考》帯両側にあらわされた半花形や半菱形が、ひつつれた印象を与えるのは、刺繡枠や台から羅地をおろした時に歪みが生じたのであろう。

6 羅道場幡頭刺繡残片（中倉202 第72号櫃 玻璃装37号）（全姿図6）

【概要】羅道場幡頭に刺繡文様がよく残存している。文様は三角の空間にはめたもので、左右



挿図26 刺繡羅帯(中倉109)の仕立て図



挿図27 刺繡羅帯(中倉109)部位3

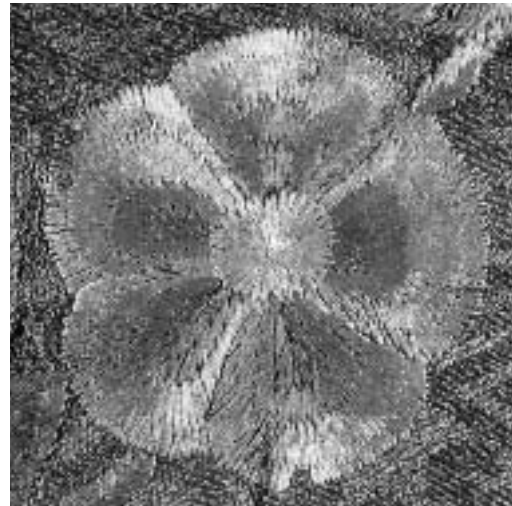
から唐花の枝を頂に向かって立ち上がらせ、頂の一花でまとめる。また底中央には半花形をのぞかせている。幡頭縁に金糸の縁飾りが施されている(三角部 - 内側に2筋、底部 - 両縁に各2筋)。

【繡文】唐花【下地裂】綾

【部位1】四弁花頂部の花、花弁と花蕊との二重の構成。《繡糸》平糸《繡技》両面刺繡

花弁 刺し繡5段。外から内へ繡う。白茶2・紫3。暈網調(口絵13)。

花芯 同心円状に3段に構成、ただし中心の緑は濃淡で4段と考えるか。外から1. 極め刺し繡、白茶。2 極め刺し繡、白茶。上に太い赤糸で蕊を間隔をおきながら、かなり自由に渡し繡う。3 極め刺し繡。外から淡緑・濃緑。中心は棧俵繡調に2~3針入れ、芯穴をかくす。



挿図28 羅道場幡 幡頭(中倉202-72号櫃) 部位2

【部位2】五弁花 二輪の唐花、左右の枝につく。花弁と芯の構成。《繡糸》平糸《繡技》両面刺繡(挿図28)

花弁 刺し繡4~5段。外から内へ。白茶2・赤・紫1~2。暈網調。花芯 棧俵繡。中心で押さえ針。

【部位3】葉 左右とも三枚の葉で構成 《繡糸》平糸《繡技》両面刺繡

葉脈 刺し繡 - 先端 - 8段。外から淡茶3・緑5。左右 - 4~5段。外から白茶3・浅葱濃淡2など。

葉脈 網代繡。葉の先端より元におさめる。

茎 網代繡。

【部位4】半花形 《繡糸》平糸《繡技》両面刺繡

花弁 刺し繻 5 段。外から白茶 2・赤 1・紫 2。

花芯 同心円状に 3 段重なる。ただし 3 段目欠失。外から 1 極め刺し繻、白茶。2 極め刺し繻、白茶。上に太い赤糸で蕊を繻う。自由に間隔をとりながら、この極め刺し繻の幅分を渡し繻う。

【部位 5】金糸縁飾

《繻技》綴じ繻。唐花の部分ではなく幡縁や幡身に金糸繻が残存する。片駒づつ綴じ上げる。金箔 5 撚。綴糸黄系 2 撚。

7 羅道場幡頭刺繻残片（中倉202 第85号櫃 玻璃装36号）（全姿図 7）

【概要】羅道場幡で、幡頭と幡身縁に刺繻文様がよく残存している。幡頭文様は、左右対称の唐花枝で、三角形空間の頂部に臥蝶が一匹あらわされている。幡頭縁に金糸繻飾りが施されている（三角部 - 内側に 2 筋、底部 - 両縁に各 2 筋）。幡身縁は細い空間に小唐花に葉をそえて蔓状に配している。

【繻文】幡頭・唐花蝶【下地裂】綾

【部位 1】花 花弁を多く重ねた八重咲の形式 《繻糸》平糸《繻技》両面刺繻

花弁 刺し繻 2～5 段。花弁の大小によって刺し繻の段数に細かい変化がある。外の花弁よりも内中央最手前の三弁を最後に繻う。

【部位 2】蕾 内外二重の構成。外は花先形、内は三葉風の表現。

《繻糸》平糸《繻技》両面刺繻

外 - 刺し繻 6 段。外から白茶 2・赤 2・紫 2。内 - 刺し繻 4～5 段。外から白茶 2～3・紫 2。

【部位 3】葉 《繻糸》平糸《繻技》両面刺繻（挿図29）

刺し繻 4 段。外から白茶 2・紫 2。

【部位 4】茎 《繻糸》平糸《繻技》両面刺繻

纏い繻

【部位 5】蝶 臥蝶形式

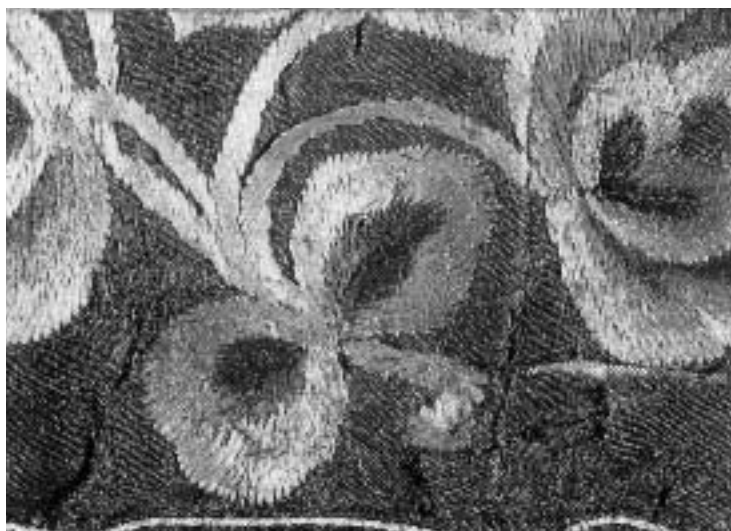
《繻糸》平糸《繻技》両面刺繻（口絵14）

胴 極め刺し繻 5 段。ただし胴 - 白茶 3。尾 - 赤・紫各 1。尾より胴へ繻う。

頭 刺し繻。三葉形式

翅 刺し繻 5 段。上方より

白茶 2・緑白茶 1・紫 2。



挿図29 羅道場幡 幡頭（中倉202 - 85号櫃）部位 3

頭触角・尾触角 鎖繡。

【部位6】金糸縁。綴じ繡。片駒つつ綴じ上げる。金箔S撚。綴糸Z撚（黄でない）。

8 羅道場幡縁刺繡残片（中倉202 第108号櫃 玻璃装142号）（全姿図8）

【概要】羅道場幡身の縁で、全体に連続する刺繡文様があらわされている。表面からは通例の刺し繡と観察されるが、先端部分に裏繡が見られ、その部分によると、裏抜繡の処理と知られ注目される。

【繡文】唐花唐草【下地裂】純

【部位1】五弁花 全花形（口絵15）

《繡糸》平糸《繡技》花卉 刺し繡4段
- 外から内へ白茶2・紫2。中心の穴を埋める繡 - 4・5針繡。

【部位2】半花形

《繡糸》平糸《繡技》花卉 刺し繡4段。
萼 刺し繡1段。

【部位3】葉

《繡糸》平糸《繡技》極め刺し繡3段。外から内へ、白茶2・青1・濃青1。

【部位4】茎

《繡糸》平糸《繡技》纏い繡。ただし網代繡に見える部分がある。また点線状に繡われている。白線による下描きがみられる。一端先の半花形と2枚の葉は繡の裏面を見せている。表面では通例の刺し繡と見えるが、この部分によれば裏抜き繡であることがわかる（挿図30）。



挿図30 羅道場幡縁刺繡残片（中倉202 - 108号櫃）
裏抜き繡

9 孔雀文刺繡幡身（南倉180 第1号）（全姿図9）

【概要】幡の一坪分で、孔雀を中心に上方には草花が立ち、また孔雀の足下、やや間をおいて枝を垂下させる花樹をあらわしている。草花の中には珍しく百合であることが明らかな植物が見られる。いずれも両面刺繡の処理。ここでは必要に応じてA面、B面と記述する。

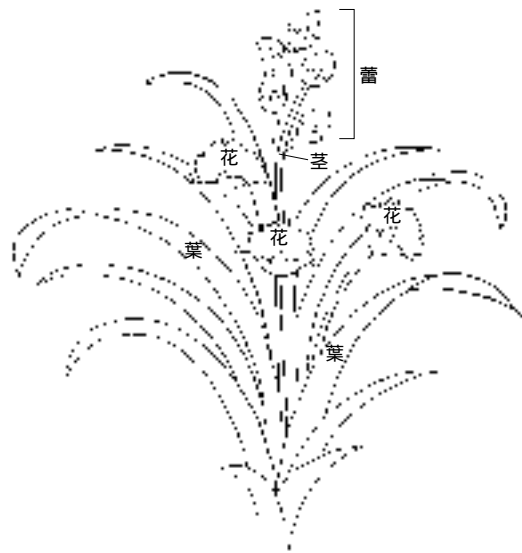
【繡文】草花孔雀花樹【下地裂】綾

【部位1】草花 《繡糸》平糸《繡技》両面刺繡（挿図31・32・口絵16 1）

花 刺し繡6段。外から内へ。白茶3・赤1・紫2。最上花には纏い繡の仕分がある。萼は刺し繡1段。

蕾 刺し繡3段。萼は刺し繡1段。

葉 刺し繡。極め刺し。表裏に糸が回るので、厚味がでる。



挿図31 部位1 (A面)



挿図32 孔雀文刺繍幡身(南倉180-1)部位1 (A面)

茎 鎖繡。上方先端は2筋、下方花茎は1筋。鎖繡はA面よりもB面の方が針目が整っている。先にA面を刺し、次でB面を繡ったことによる。後繡のB面の針がA面の随所に出ていることによって知られる。

【部位2】孔雀 《繡糸》平糸《繡技》両面刺繡(挿図33)

飾羽 刺し繡、2段と3段。(口絵16 2)

頭・頬 刺し繡6段。外から焦茶1・青1・淡青1・白茶3。嘴から目への線で繡分ける。

目 変わり刺し繡。瞳を中心に糸の方向をかえて繡う。その上に瞳を点じる。

嘴 刺し繡1段。嘴の上下を繡い分ける。

首 刺し繡4段。外から焦茶1・青1・淡青1・白茶1。

胸・腹・尻 刺し繡。胸7段、腹8段、尻4段。暈網風。全体に糸は太い。腹と風切羽の間に、両面刺繡特有の針の乱れを修正するための繡い足しがある。

翼 雨覆羽 - 刺し繡2・3段(焦茶・淡青、焦茶・青・淡緑)。羽 - 刺し繡3段(茜1・白茶2)の繰り返し。この部分は全体に糸は細手であるが、最上部の2段には比較的太い糸が用いられている。風切羽 - 刺し繡3段(青・白茶・茶)の繰り返し。

尾羽 根元からa、b、cの三部分にまとめられる。(口絵16 3)

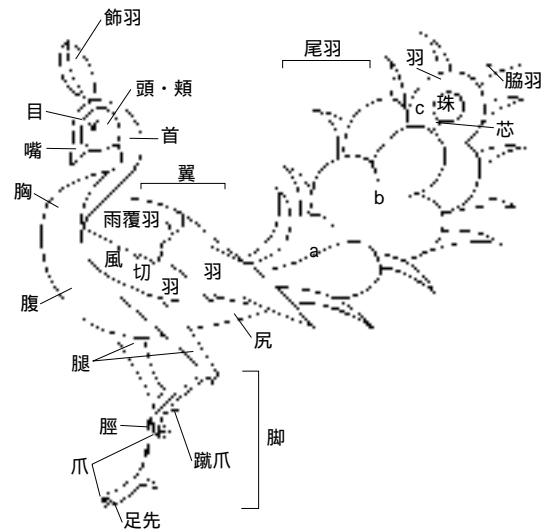
珠a - 刺し繡3段、外から紅・紫・淡青。羽 - 刺し繡4段、外から紅・淡紫・淡青・青。

芯 - 鎖繡、白。

珠b - 刺し繡4段、外から紅・紫・淡青・青。羽 - 刺し繡4段、外から紅・淡紫・淡青・青。芯 - 鎖繡、白。

珠c - 刺し繻4段、外から紅・紫・青2段。羽 - 刺し繻4段、外から紅・紫・青2段。芯 - 鎖繻、白。脇羽 - 纏い刺し繻2段。

脚 腿 - 刺し繻4段、外から淡青・青・白茶2段。脛 - 纏い繻。纏い繻はA面よりB面の方が美しい。それはB面より針を刺したため。B面のよい繻は急角度で針足が長く、A面は角度はゆるやかで針足短い。足先 - 刺し繻、白茶。蹴爪 - 刺し繻、緑。爪 - 刺し繻、緑。爪を先に繻い、足先などを繻いかぶせる。



挿図33 部位2 (A面)

【部位3】百合 三輪の花は頂上左右と下段で、ここではa、b、cに分けて記す。

《繻糸》平糸《繻技》両面刺繻 (挿図34・35)

花a 筒部 - 刺し繻5段。花弁 - 纏い刺し繻5段。

花b 筒部 - 刺し繻4段。

花弁 - 纏い刺し繻。花弁は左3段・右4段。

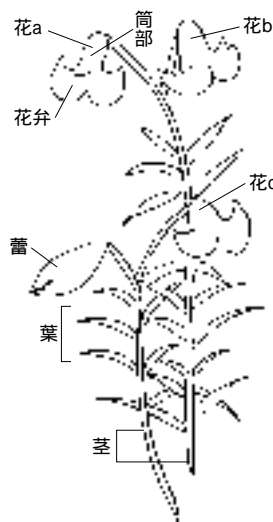
花c 筒部 - 刺し繻4段。

花弁 - 纏い刺し繻。花弁は左3段・右4段。蕾 - 刺し繻8段

葉 刺し繻と斜め繻。左の蕾下の三枚の葉は刺し繻、他は全て斜め繻。

茎 鎖繻。他の鎖繻と同様

にA面を先にB面を後に刺したのか。



挿図34 部位3 (A面)



挿図35 孔雀文刺繻幡身 (南倉180-1) 部位3・4・5 (A面)

【部位4】草 孔雀の足下、花樹の上方にあらわされた3つの叢。《繻糸》平糸《繻技》両面刺繻鎖繻と纏い繻。右側の下2筋のみ纏い繻、他はすべて鎖繻。他の場合と同様A面を先とし、B面を後から刺したか。

【部位5】石 草とともにあらわされる。《繻糸》平糸《繻技》両面刺繻。刺し繻。次のような注目点があげられる。

- 1、刺しの方向を変えることで光沢の変化をあらわす。
- 2、不整形な楕円形を時計まわりに廻転しながら刺す場合がある。

【部位6】花樹

《繡糸》平糸《繡技》両面刺繡（挿図36）

四弁花 花弁 - 刺し繡。淡紅と茜。芯 - 棧俵繡風。2針繡。針目を揃えないで2、3回重ねて繡う。

葉 割り繡 - 先端・外側から内へ繡う。

枝 鎖繡。

蕾 刺し繡 - 淡茶と茜。

【部位7】幹

《繡糸》平糸《繡技》両面刺繡。鎖繡。

根元から上方へ刺す。鎖繡の刺し始め

は針足が乱れるのでこの部分は刺し繡

を足して調節した可能性がある。鎖繡はA面よりB面の方が針目が整う。これは他の部分と同様先にA面を刺し、ついでB面を刺すことが理由で、B面を刺した針目がA面に出ている。



挿図36 孔雀文刺繡幡身（南倉180 - 1）部位6

10 吉字刺繡飾方形天蓋残欠（南倉181 第7号）（全姿図10）

【概要】方形天蓋の残欠。刺繡の装飾は方形の周に垂下する部分に施されている（現存するのは長辺の一部と、一方の短辺。ただし長辺には原初の姿を想像させる程度が残存し、短辺はさらに一部分をのこすのみ）。

【繡文】1 吉字入り枠並べ、2 唐花唐草、3 小髷舟形繫ぎ。

【下地裂】1 薄物（平織）、2 綾、3 薄物（平織）。

【部位1】吉字入り枠並べ 天蓋長辺の丈が短い水引。段のある枠の内に吉字が天地逆字にあ

らわされ、並べ意匠とする。この部分の刺繡は諸撚糸を綴じ上げで、全面を繡い詰める。

すべて水引が垂下するという方向性を意識して繡い、糸は垂直に並ぶ（口絵17）。

色は、吉(黒)- 枠(赤)- 地(赤)、吉(赤)- 枠(黒)- 地(黒)の繰り返し。

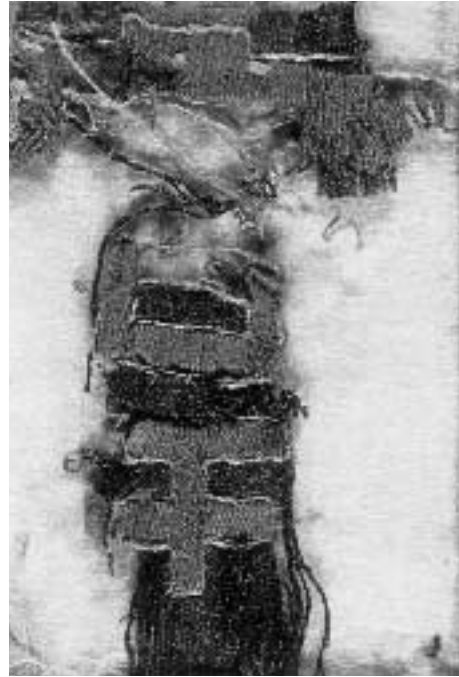
《繡糸》諸撚糸、S撚。《繡技》各種

吉字 黒、赤。薄物を地とし、後世言う紹刺しの風合い。廻転繡 - 針をおろして、そのまま裏面をまわり、一廻転させて表面にあげる。その繰り返しかえして、面(吉字)をつくる。

返し繡 - 針をおろして、表面の糸に沿って、わずかに返った箇所から針をあげて繡いすすんでその線を並べて面(吉字)をつくることの繰り返し（挿図37）。

棹 黒、赤。廻転繡 - 針をおろしてそのまま裏面をまわり、一廻転させて表面にあげる。その繰り返して面(棹)をつくる。返し繡 - 針をおろして、表面の糸に沿ってわずかに返った箇所から針をあげて繡いすすんでその線を並べて面(棹)をつくることの繰り返し。裏抜き繡 - 広い面は、針をおろして、裏面に点繡を見せ、すぐ針をあげて表面にのみ長く糸をわたして形象をつくる。

地 黒(欠失が多い)、赤。廻転繡 - 針をおろしてそのまま裏面をまわり、一廻転させて表面にあげる。その繰り返して面(地)をつくる。綴じ繡 - 広い面は糸を表面に長くわたして、綴じ糸で綴じ上げて面(地)をつくる。色の替わる部分で繡糸が引き返しているのが観察される。



挿図37 吉字刺繡飾方形天蓋残欠(南倉181-7) 吉字部分

【部位2】唐花唐草 吉字水引の下の蓮弁形の垂れ飾りの繡。現在は5枚が本体についたまま残っている。唐花唐草文はほぼ同一。全体に垂下する構成で、上方左右隅から伸びる唐草が中央で出合い、大花をあらわす。大花の左右に小花をつける。さらに唐草は大花の左右に分かれて垂下し、再び一つになって中央に小花をつける。唐草の要所に葉をあらわす。さらに切付による葉などを加える。下記の細目は現存する左端の垂れ飾りによる。

《繡糸》平糸 《繡技》各種

中央大花 前後各5花弁の構成。なお後5弁の中央は特に長くして色を変えている。また5片に分かれた萼をあらわす。

前花弁 - 刺し繡6段 白茶2・赤2・白茶2。

後花弁 - 刺し繡 中央6段 白茶2・黄緑1・青3。

左右各2 4段 白茶2・赤1・白茶1。

萼 - 刺し繡4段 白茶2・黄緑1・青1。

中央小花 大花の左右に各1。5弁からなり、3片に分かれた萼をあらわす。

花弁 - 刺し繡4段 白茶2・濃紫1・淡紫1。

萼 - 刺し繡3段 白茶2・黄緑1。

最下花 刺し繡5段 濃紫1・淡紫2・白茶2。

葉 唐草の蔓先や蔓中であらわされる。さらにあたかも花萼のような表現が見られる。

蔓先の葉 - 刺し繡5～6段 白茶2・黄緑1・淡青2～3。

葉脈 - 矢筈繡・網代繡・鎖繡。

翻り - 刺し繡4段 白茶2・赤・白茶または濃茶1。



挿図38 吉字刺繍飾方形天蓋残欠(南倉181-7)網代繻



挿図39 吉字刺繍飾方形天蓋残欠(南倉181-7)鎖繻

萼 - 刺し繻 3 段 白茶 1・黄緑 1・青 1。
切付 葉 切付による処理が、最上縁際や最下垂花の左右下方に見られる。切付下地は綾や純。

刺し繻 3 ~ 5 段 白茶 1 ~ 2・赤 1 ~ 2・濃青。

切付 半月形垂飾 垂花最下先に半月形の飾をつける。これも切付。現状では左方に寄せて切付処理されている。

刺し繻 5 段 濃紫 1・淡紫・白茶 2。

唐草 上方から下端まで垂下する唐花や葉を唐草軸でつなぐ。太い軸の繻技は各所によって、あるいは現存 5 枚の垂飾によって、自在に変化している。ここでは垂飾左から 1 ~ 5 の順とする。

繻各種

- 1 刺し繻 - 白茶。返し繻 - 青で両縁をとる。
 - 2 網代繻 - 白茶。刺し繻 - 白茶。鎖繻 - 白茶。返し繻 - 青、すべての軸の両縁(挿図38)。
 - 3 鎖繻 - 白茶、鎖繻を 2 列並べる。網代繻 - 白茶。返し繻 - 青、軸の両縁。
 - 4 鎖繻 - 白茶、鎖繻を往復 2 列並べる。返し繻 - 青、軸の両縁(挿図39)。
 - 5 刺し繻 - 黄緑。鎖繻 - 青、軸の両縁。他と異なった色の組み合わせ。
- 5 の下端左に綾地切付が残る。しかし繻糸は欠失し、墨下描線が見られる(挿図40)。

【部位 3】小髷舟形繫ぎ 格子文の水引とその縁の小髷地に舟形繫ぎ文をのせるようにあらわす。格子文は織技による。小髷地に舟形繫ぎ文は特殊な繻による。この繻水引部分は幅せまく、経 6 本入り箴目 7 つ分と考えられる。その両縁(経 6 本入り箴目 2 つ分が左右に)に小髷、中央(経 6 本入り箴目 3 つ分)に舟形繫ぎがあらわされる(口絵18)。



挿図40 綾地の切付と刺繍の墨絵下絵

《繡糸》諸撚糸

《繡技》紹刺し繡風。経に6本入りの箴目のある薄物裂を用いて、箴目を利用して平繡で紹刺し繡風に繡う。

小髻 赤・黒・白茶糸で各色経6本入り箴目を一単位としてすくい、表裏面に2越ずつであらわした小髻を二列とする（舟形繫ぎをはさんで左右に二列ずつ配している）。特に白茶は3つずつ意識的にまとめ赤・黒の中に散らされている。

舟形繫ぎ 経6本入り箴目3つ分の間に緯16越でおそらく裏抜きとして舟形をあらわし繫ぐ。舟形は黒地の上ののる。赤・淡赤・暗黄緑の順。金糸片駒繡の連続で舟形の輪郭を綴じ上げる。金箔S撚、綴糸は黄。

11 羅道場幡頭刺繡残片（南倉185 第126号櫃 第125号）（全姿図11）

【概要】三角形幡頭中央に二羽の尾長鳥を、中心に向けて羽をひろげ、尾羽をそれぞれ内に孤を描くように、左右対称にあらわす。空間には葉か見える形象をあらわし、底部の左右隅に各一花を配している。いずれも形象表現は刺繡による。なおこの面では鳥の頭部は幡舌によっておおわれていて明確ではない。幡舌の下になる幡頭の芯部には花があらわされているか。幡頭縁裂に金糸の繡飾りを加える（三角部 - 内側に2筋、底部 - 上下両縁に各2筋）。

【繡文】双尾長鳥と花 【下地裂】綾

【部位1】尾長鳥 《繡糸》平糸《繡技》両面刺繡

首 繡い切り。頭部に向けて刺し繡風となる

雨覆羽 鱗状三段にあらわす。刺し繡3～4段。繡は外から内へ。雨覆羽の上から順に、濃茶1・白茶1・赤1・紫1、白茶2・紫1・濃紫1、黄1・淡青1・紫1。

風切羽 長短3枚にあらわす。刺し繡各4段。繡は外から内へ。風切羽の短から長へ、黄2・藍1・紫1、淡茶1・黄1・赤1・紫1、茶1・黄1・赤1・紫1。

胴 刺し繡3段。白1・淡紫1・紫1。

尾 長い尾は長短3本にあらわされる。矢筈繡 - 根から先端に向けて3色の組み合わせを重ねる。最内側から、藍・紫(欠失)白茶・藍・紫(欠失)、白茶・藍・紫(欠失)・白茶・藍・紫(欠失)、白茶・藍・紫(欠失)・白茶・藍・紫(欠失)。(口絵19)

【部位2】花

《繡糸》平糸《繡技》両面刺繡（挿図41）

花卉 芯部の小花弁、前3弁、後3弁の構成。刺し繡 - 前4段 - 白茶2・藍1・紫1。後3段 - 茶1・黄1・紫1。外側の大花卉 - 奥の花卉は一部幡縁にかくれ



挿図41 羅道場幡頭（南倉185 - 126号櫃 - 125）
部位2

ている。5段 - 白茶2・紫2・濃紫1(欠失)。欠失した濃紫の下に糸が残っているが意図不明。

【部位3】葉 現状では双鳥と2花を中心とし、余の空間に左右3枚ずつ6枚が見られる。2葉に短い茎が見られる。1葉は中心の3葉とその外周の三つ盛形と2重の構成となっている。

《繡糸》平糸《繡技》両面刺繡

中心 刺し繡3段 - 白茶2・紫1。

外周 刺し繡3段 - 白茶1・淡青1・紫1。

茎 纏い繡。濃紫。

【部位4】金縁

綴じ繡 - 片駒ずつ綴じ上げる。

金箔はS撚、綴じ糸は黄、Z撚。

【備考】双鳥とも首下に墨下描線が見られる。また尾の紫糸欠失部にも同様の墨線が見られる。

12 羅道場幡頭刺繡残片(南倉185 第128号櫃 第12号) (全姿図12)

【概要】幡頭の三角形空間を考慮して唐花文様を構成する。中央先端(四弁花、ただし上二弁は縁下に入る)とその下(八弁花、ただし四弁は縁下にかくれるので、もともとあらわされない)に花を配し、左右隅よりに各々1本の枝が立ち上がり、先端の花と茎で結ばれる。縁裂上に金糸繡を施す(金糸は、三角部の内側に2筋、底部の上下両縁に各2筋)。

【繡文】唐花唐草【下地裂】綾

【部位1】四弁花 わずかに花先形をしめす四弁内に三葉形をおさめ、中心は四色を捻じ合わせたような複雑な構成の花芯でまとめる。《繡糸》平糸《繡技》両面刺繡(挿図42)

花弁 刺し繡4段 - 黄(青味)1・淡青(黄味)1・黄(青味)1・紫1。

三葉形 刺し繡2段 - 黄(青味)1・淡青1。

花芯 平繡 - 1淡茶、2濃茶、3・4黄(緑味)。円形で複雑な針の進め方が見られる(挿図43)。

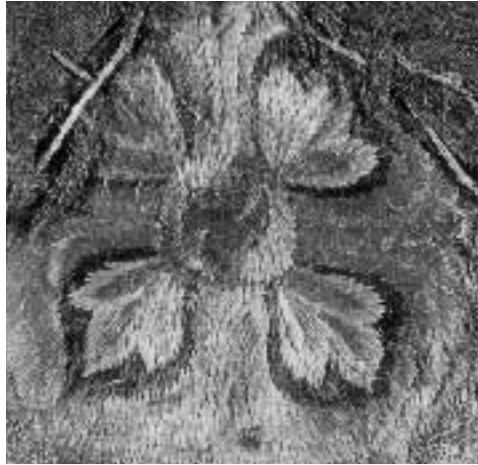
【部位2】八弁花 円花弁を外に、内には三葉形を立て、芯に勾玉を正逆あわせたと、太極図とも考えられる円形をあらわす。《繡糸》平糸《繡技》両面刺繡(口絵20)

花弁 刺し繡4段 - 白茶1・白1・淡茶(淡青とするものがある)1・紫1。

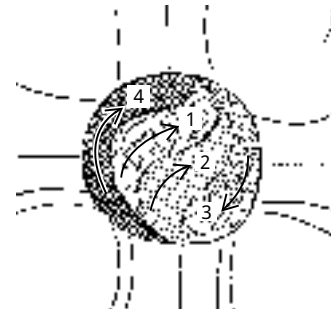
三葉形 刺し繡2段 - 黄(緑味)1・淡茶1。立ち上がる茎は刺し繡。葉の流れで同色(黄・淡茶)処理。

花芯 捻じ文様のような複雑な構成。勾玉風部分 - 刺し繡2段 - 青2。2つの勾玉を分ち、さらにつづいて全体の輪郭となる線 - 刺し繡1段 - 黄。

【部位3】花葉枝 《繡糸》平糸《繡技》両面刺繡



挿図42 羅道場幡 幡頭 (南倉185 - 128号櫃 - 12)
部位 1



挿図43 花芯の針の刺し順

五弁花 複雑な刺し方の円形花芯がある。

花卉 - 刺し繻 4 段 - 黄(青味)2・淡紫1・紫1。花芯 - 纏い刺し繻 - 黄(緑味)。

葉 三葉形の大葉の中心に小三葉を重ねる。

大葉 - 刺し繻 3 段 - 淡黄1・黄緑(又は黄)1・青(又は紫)1、又は白茶1・茶1・青1。

葉脈 - 大葉の中心を葉脈とした刺し繻 - 淡黄、又は網代繻風刺し繻 - 黄。小三葉 - 刺し繻
3 段 - 淡青1、黄1、紫1、又は黄(淡青味)2・青1、又は淡黄1・白1・紫1。

茎 変わり割り繻(網代繻風) - 茶。

【部位4】金緑 綴じ繻。片駒つつ綴じ上げる。金箔S 撚、綴じ糸は黄、S 撚。

13 羅道場幡頭刺繻残片(南倉185 第128号櫃 第152号) (全姿図13)

【概要】幡頭の三角形の空間を生かした構成で、風景的テーマによる。中央左右に松と竹、松の左に岩と低松、竹はしなう姿を見せ、姿態に合わせた形で筍を添える。濃やかな想い入れが感じられるが、その中心は吉祥の思想であろうかなど想わせる。繊細で行きとどいた刺繻振りがきわめて魅力にとむ。幡頭縁は銀糸で縁取りがある(三角部 - 内側2筋、底部 - 両縁に各2筋)。

【繻文】松竹景【下地裂】綾

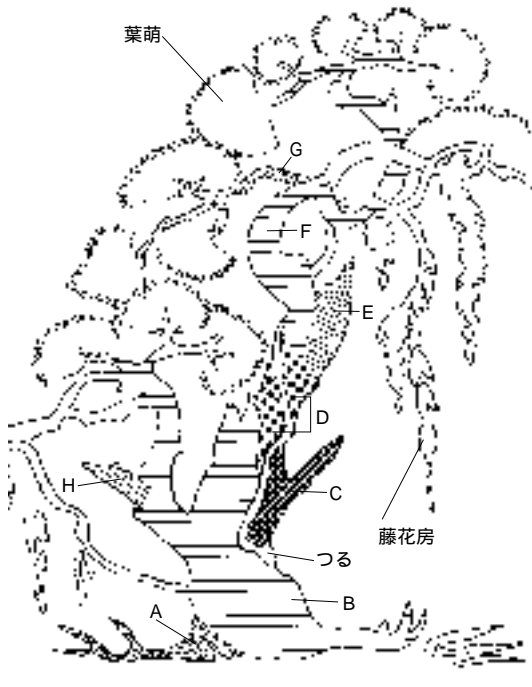
【部位1】松 幹をよじるようにして幡頭中央に枝をさしのばす。幹にからみ枝から藤が垂れる。幹の繻は特に空糸の色を変化させて立体的表現への意図が明らかである。

《繻糸》平糸・空糸《繻技》両面刺繻(挿図44・45)

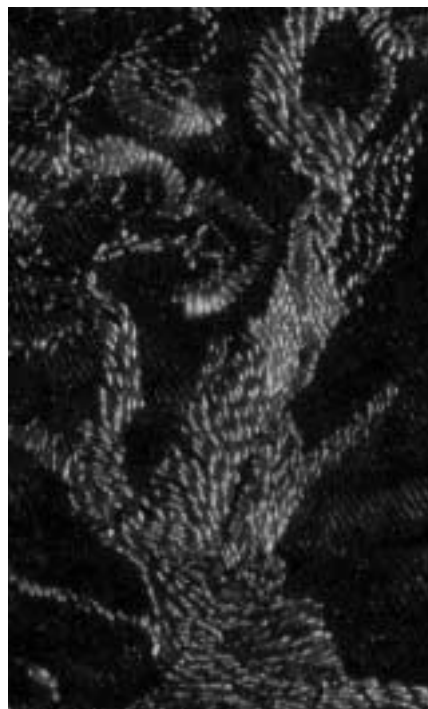
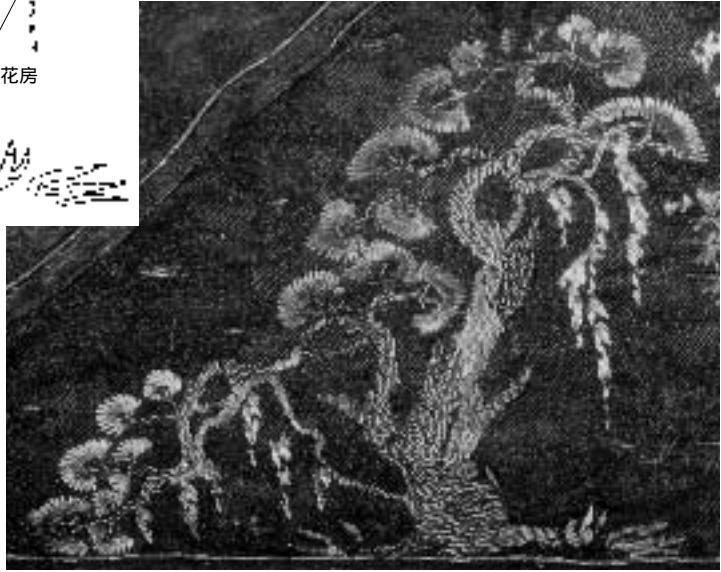
幹 よじるようにS 流れで空糸を用い分ける。下部から上方へ、枝にも注目する。

A (最下部)	刺し繻	空糸 - 紫・白茶	Z 撚
B	刺し繻	空糸 - 白茶・茶	Z 撚(挿図46・47)
C (右方に伸びる枝)	刺し繻	黄緑	Z 撚
D	刺し繻	空糸 - 黄緑・淡茶	Z 撚
藤づる	返し繻	平糸 - 黄緑	(口絵21)

挿図44 部位1の幹(A面)



挿図45 羅道場幡 幡頭 (南倉185 - 128号櫃 - 152) 部位1 (A面)



挿図46 部位1 (A面)



挿図47 同左 (B面)

E 刺し繻 空糸 - 淡緑・紫 Z 撚

F 刺し繻 空糸 - 白茶・茶 Z 撚

G (左方へ伸びる枝) まき繻 空糸 - 白茶・紫 Z 撚

H (Bから分かれて左方へ伸びる脇幹) 刺し繻 空糸 白茶・紫 Z 撚

枝1 Fより上方へ細く分かれて伸びる。重なりや交叉を考慮しつつ立体感ある繻。

刺し繻、空糸 - 白茶・紫、Z 撚。先端は纏い繻。

枝2 Bより左へ、岩を超えて低く伸びる。

刺し繻、空糸 - 紫・白茶、Z 撚。先端は纏い繻。

葉萌 極め刺し繻2段 - 緑(又は黄・黄緑・茶)1 - 黄(又は白茶)1。

葉萌は極め刺し繻で上下2段とするが、先ず下段を外側から繻い、次いで上段も外側から繻う。

藤花房 柔らかく垂下する様を自在に繻う。みだれ刺し、白茶・濃白茶。

【部位2】岩 松樹の左方にうづくまるようにあらかず。ただし輪郭と少々峻による。

《繻糸》平糸《繻技》両面刺繻。

輪郭 纏い繻 - 黄緑。峻 みだれ刺し繻 - 白茶・淡紫。岩の裾に黄糸の痕跡がある。

【部位3】竹 幡頭右半分に竹叢をあらわす。左右へ幹葉をゆらし、交叉させ、竹の高低を空間におさめる配慮がされている。二本の筍が生えているところ(口絵22)。

《繻糸》平糸・空糸《繻技》両面刺繻。

幹 纏い繻 - 淡黄緑、又は緑。

小枝 みだれ刺し - 白茶(緑味)。

葉 一本繻を自由に処理する。白茶又は白茶濃淡、黄緑。

筍 二本。刺し繻2~4段。空糸 - 赤・白茶、Z 撚。

皮先 白・紫。きわめてゆるいZ撚。部分的に単に二色の平糸を引きそろえたようにも見える。

【部位4】銀緑 綴じ繻。片駒づつ綴じ上げる。ただし、綴じ方に特色がある。通例は綴じ糸を裏面におろし裂裏を通して次の綴じ部分に進むが、この場合は銀糸を綴じては表面を銀糸に添って進み、さらに綴じて同様に進むことを繰り返す。

銀箔幅4mm、S撚。綴じ糸はZ撚。

14 羅道場幡頭刺繻残片(南倉185 第128号櫃 第235号) (全姿図14)

【概要】幡頭の特殊な空間に大唐花唐草を配しているが、本来は他に用いられていた繻裂をここに再度用いているものか。表面は幡舌があるために特に中央花が完全に見られない。裏面によって全貌をうかがうことができるが、細部に両面刺繻でない箇所が指摘できる。花や蔓・葉ともに金糸の輪郭や仕分けなどの効果が多用されている。幡頭縁に金糸がめぐらされて縁飾りとなっている(金糸は、三角部の内側に2筋、底部の両縁に2筋づつ)。

【繡文】大唐花唐草【下地裂】羅

【部位1】花Ⅰ 幡頭中央。ただしここでは幡舌によってその左部分しかみることができない。

《繡糸》平糸 《繡技》両面刺繡

中央花実房 同花文裏面によれば萼と二重の花実房が中心となる。その外房のごく一端が幡舌からのぞいている。刺し繡2段 - 黄緑、金糸輪郭。(口絵23)

萼 刺し繡2段 - 黄緑1・青1・金糸輪郭。

花弁 中央花実房を囲む花弁、4枚(本来6弁か)。刺し繡3～5段 - 黄緑1・青2(又は淡青1)・紫(欠失)1(又は青1)。金糸輪郭。

脇蕊 4枚の花弁からのぞく。芯、花粉珠。芯 - 平繡 - 青。花粉珠 - 平繡 - 黄緑、金糸輪郭。

大花弁 最外大花弁4枚。刺し繡3～5段 - 黄緑3～5、金糸輪郭。

【部位2】花Ⅱ 幡頭右傾斜縁に半ばかくれる。まわりを現状5枚の葉がとり囲んでいる。

《繡糸》平糸・空糸 《繡技》両面刺繡(挿図48)

中央花芯 2重の半円形。その外側に小輪花を配している。内 - 平繡、黄緑。外 - 平繡、白茶、すべて金糸の仕分け。小輪花 - 平繡、白茶。

花弁 花芯を囲む中央に切れ込みのある4弁(ただし1弁は小部分をのぞかせるばかり)。4弁 - 刺し繡3～6段 - 白茶3～6、金糸輪郭。さらに最外弁の2弁がきわめてわずかのぞく。2弁 - 刺し繡2段 - 白茶2、金糸輪郭。

小花弁 花Ⅱと重なるように小花弁と蕊(先端に5個の花粉珠)。花弁 - 刺し繡2～3段、白茶2～3、金糸輪郭。花粉珠 - 平繡、白茶、金糸輪郭。花粉軸 - 纏い繡、空糸、白茶・紫。

葉 刺し繡4～5段 - 黄1(又は黄緑1)・黄緑1(又は淡青1・2)・青1(又は青2、淡青1)・淡青1(又は青1)・濃青1(又は紫・欠失)。金糸輪郭、葉脈に金糸の仕分け。

【部位3】蔓 幡頭右傾斜縁より画面に入った2本の蔓と節 《繡糸》平糸 《繡技》両面刺繡

蔓 蔓 - 纏い繡 - 青、金糸輪郭。節 - 割り繡 - 青、金糸輪郭と仕分け。刺し繡、2段、青2、金糸輪郭と仕分け。

【部位4】葉 蔓に付く葉4箇所。完形は1箇所。《繡糸》平糸 《繡技》両面刺繡

葉 刺し繡3段 - 黄1・黄緑1・青1。

【部位5】金糸

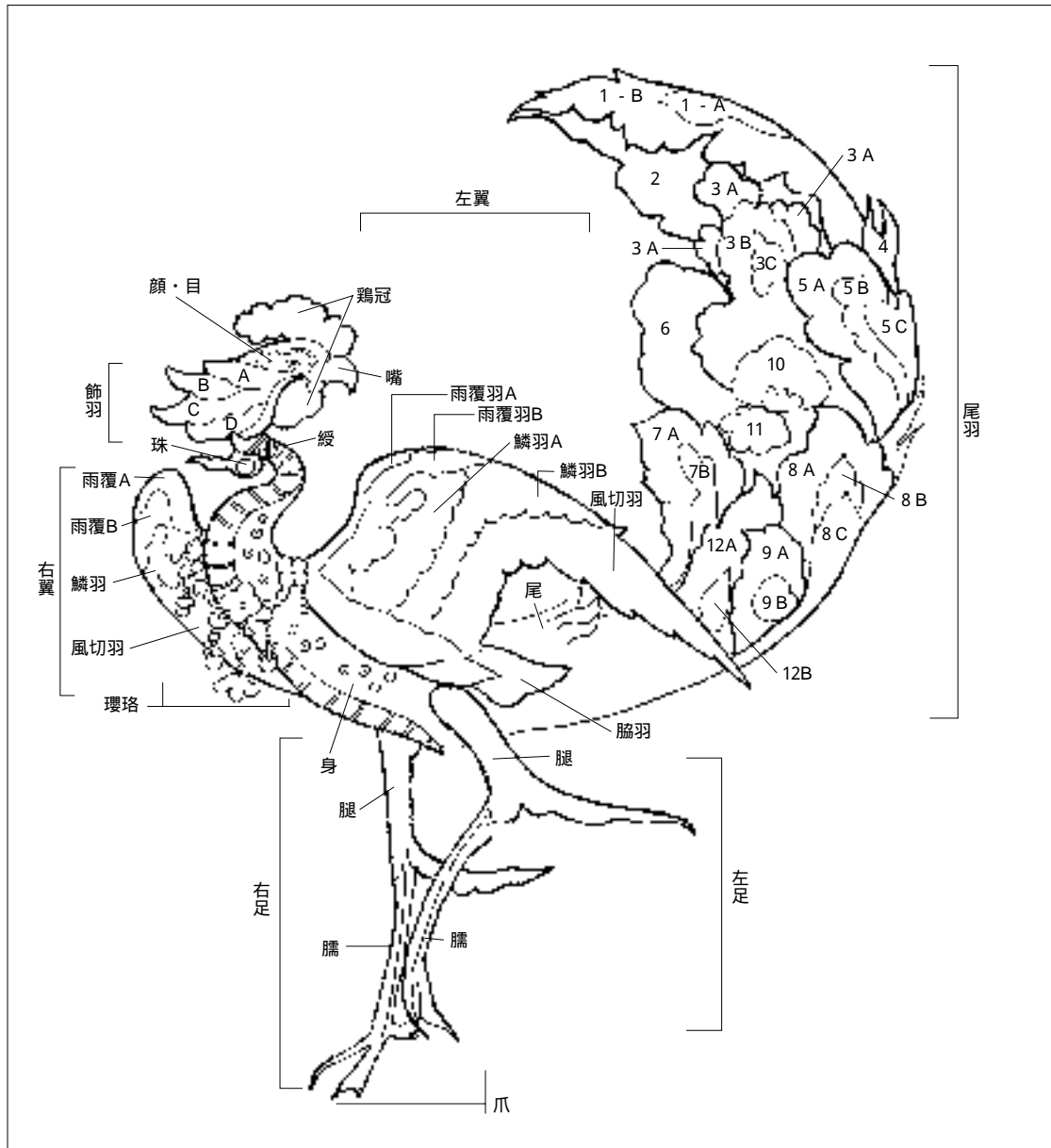
大唐花唐草の輪郭や仕分けは、出来るだけ切らずに花などの形象にしたがって、交叉部分ではそれぞれ互いにのせたり、くぐらせたりしながら這わせるように綴じている。金箔S撚、芯糸Z撚、綴糸は細く甘撚、黄。

縁飾 唐花唐草用の倍に近い太さ。金箔S撚、芯糸S撚、綴糸は細くZ撚、黄。

挿図48 羅道場幡 幡頭 (南倉185 - 128号櫃 - 235) 部位 2



挿図49 部位 1



15 花喰鳥文刺繡残欠（南倉185 第128号櫃 雑第31号）（全姿図15）

【概要】大型の花喰鳥をきわめて華麗にあらわしたもので、鳥は対称的に向かい合っていたものであろう、対になる鳥の一部が残存する。先に全体にわたる注目点をまとめておく。

- 1、金糸が、かなりの部分で効果的に用いられている。
- 2、金糸は全体に細い場合は3掛のS撚り、太い場合は5掛のZ撚り。
- 3、金箔の紙への接着剤は漆か。白茶や赤がみとめられる。
- 4、金糸の繡技にはつまみ出しが巧みに用いられている。
- 5、諸撚り糸（S撚）が縁取り部分に用いられている。
- 6、裏地に綾をつける。
- 7、縫い込み部分に刺繡が入っているので、刺繡の後の縫製と知られる。
- 8、用途は帳であろうか。

【繡文】花喰鳥【下地裂】羅 紵を重ねる

【部位1】鳥 《繡糸》平糸《繡技》各種（挿図49）

頭 顔 - 纏い刺し繡。線がきまっている。捨て針があると思われる。刺す順は目尻から目頭へ向かって外から刺し進め、最後に目を入れる。（口絵24 上）

目 白目 - 平繡。瞳 - 黒糸あるも、それは厚味をあらわすための捨て針と思える。上に刺された糸は欠失したか。縁取 - 鎖繡。眼窠 - 鎖繡、5列。

嘴 金駒繡詰。つまみ出しの処理。縁取 - 鎖繡の纏い取り。鼻の部分 - 地落ち。偶然おちたか。

鶏冠（頭頂・頬下）刺し繡。刺し繡で埋めた後、その上に別糸で芥子繡を施す。縁取 - 鎖繡。

飾羽 上方より4段（A, B, C, D）を重ねる。それぞれ主色を紫・青・赤・青とした量綱の処理。いずれも外から内へ刺す。

A 纏い刺し繡5段。縁取・仕分は鎖繡。

B 極め刺し繡4段。縁取・仕分は鎖繡。

C 極め刺し繡4段。縁取・仕分は鎖繡。

D 刺し繡。細い箇所は纏い繡風。

身 胸 - 刺し繡5段。段色替り。胴 - 刺し繡で全体を埋めた上に菊繡を刺す。縁取 - 諸撚糸。かくしとじ。（口絵24 下）

綬 段 - 鎖繡3段。ただし下縁にも3段を繡う。×形飾 - 纏い繡。×形の四つの間隙 - 平繡。ただし四間はそれぞれ左右は水平、上下は垂直に繡う。この部分の繡順は、上方から

1．赤の鎖繡、2．緑の鎖繡、3．赤の鎖繡（以上は段、下縁にもある）、4．平繡 ×形の間隙、5．緑の纏い繡（×形飾）

珠 流るる気 - 刺し繡、赤、外から内へ。中心珠 - 刺し繡、白、外から内へ。白糸繡で仕分け

尾 尾筒 - 刺し繻。紫で埋め、上に菊繻。金糸(S撚)で縁取り。小尾羽 - 刺し繻。3本各5段。金糸による各縁取。

瓔珞 四弁花 - 刺し繻。3輪、3~2段、外から内へ。芯 - 菊繻。金糸(Z撚)で片駒縁取。連珠 - 駒詰。金糸(S撚)3掛、銀糸(S撚)3掛。中心から外

へ渦巻で詰める。房先花飾り - 刺し繻、緑。金糸(S撚)縁取。

右翼 雨覆羽。A刺し繻5段。紺糸。B刺し繻4段。紫糸。2列に表現。鱗羽 - 刺し繻4段。赤茶糸。風切羽 - 刺し繻4段。白茶糸。雨覆羽の一部と風切羽の最外部には金糸(S撚)と白糸(諸然)二重の縁取。

左翼 雨覆羽。A刺し繻4段。紺糸。B刺し繻4段。紫糸。鱗羽 - A刺し繻4段。赤茶糸。B刺し繻3段。緑糸。風切羽 - 刺し繻4段。白茶糸。金糸(S撚)片駒縁取。脇羽 - 刺し繻3~5段。7枚。1枚毎に金糸(S撚)片駒縁取(挿図50)。

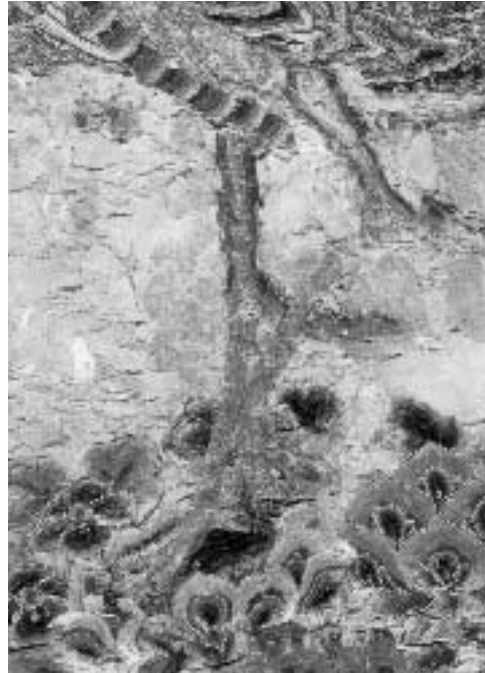
左足 腿 - 刺し繻4段。腿付根は糸の脱落が多い。金糸縁取りの痕跡が有る。臑~足先 - 刺し繻。臑幅を二つに分けて刺し、中央に鎖繻一筋が走る。爪 - 駒詰繻。銀糸(Z撚)。綴糸(Z撚)で銀糸3本、1本綴じなど不揃い(挿図51)。

右足 腿 - 刺し繻4段。金糸(S撚)縁取。臑~足先 - 刺し繻。臑幅を二つに分けて刺し、中央に鎖繻一筋が走る。爪 - 駒詰繻。銀糸(Z撚)。

尾羽 尾羽は尾根元から尾先まで9枚にまとめられ、それぞれは宝相華文の葉のように華麗な表現。羽7・8の間から、二茎の花が立ち上がる(挿図52)。



挿図50 花喰鳥文刺繻残欠(南倉185-128号櫃-雑31) 部位1-左翼



挿図51 花喰鳥文刺繻残欠(南倉185-128号櫃-雑31) 部位1-足



挿図52 花喰鳥文刺繻残欠(南倉185-128号櫃-雑31) 部位1-尾羽

- 1 . 羽 2 重。A 刺し繻 3 ~ 4 段。金糸(Z 撚)片駒の仕分縁取。B 刺し繻 5 段。金糸(Z 撚)片駒の仕分縁取。
- 2 . きめ刺し繻 6 段。金糸(Z 撚)片駒の仕分縁取。
- 3 . 羽 3 重。A 刺し繻 3 段。金糸(S 撚)片駒の仕分縁取。B 刺し繻 5 段。金糸(S 撚)片駒の仕分縁取。C 刺し繻 5 段。金糸(S 撚)片駒の仕分縁取。
- 4 . 刺し繻 4 段。
- 5 . 羽 3 重。A 刺し繻 5 段。金糸(S 撚)片駒の仕分縁取。B 刺し繻 5 段。金糸(S 撚)片駒の仕分縁取。C 刺し繻 5 段。
- 6 . 羽 2 重。A 刺し繻 B 刺し繻(A ・ B とともに破損多く詳細不明)
- 7 . 羽 2 重。A 刺し繻 4 段。金糸(S 撚)片駒の仕分縁取。B 刺し繻 3 段。
- 8 . 羽 3 重。A 刺し繻 5 段。金糸(S 撚)片駒の仕分縁取。B 刺し繻 4 段。C 刺し繻 6 段。金糸(S 撚)片駒の仕分縁取。葉脈 - まつい繻。
- 9 . 葉と花の表現 葉 - 刺し繻 5 段。金糸(S 撚)片駒の仕分縁取。
花 花弁 - 刺し繻 4 段。萼 - 刺し繻。棧俵繻風にまとめる。金糸(S 撚)片駒の仕分縁取。
- 10 . 花 花弁 - 刺し繻 5 段。萼 - 刺し繻 1 段。茎 - 纏い繻。金糸(S 撚)片駒の仕分縁取。
- 11 . 花 花弁 - 刺し繻 4 段。外から内へ。茎 - 纏い繻。
- 12 . 羽 2 重。A 刺し繻 4 段。金糸(S 撚)片駒の仕分縁取。B 刺し繻 5 段。葉脈 - 纏い繻。

【部位 2】台座 一叢の唐花の団花が花喰鳥の台座を構成し、その中央に蓮座をあらわして花喰鳥が片足立する。 《繻糸》平糸《繻技》各種

蓮座 蓮弁 - 刺し繻。外 4 段、内 8 段。内弁に金糸(S 撚)片駒の仕分縁取。蓮実 - きめ刺し繻 7 段。金糸の痕跡は見られるが欠失。芯 - 纏い繻。

唐花大 花弁 - 刺し繻 9 段。外から暈縹風に刺し、中心部は三つ葉の構成。最外と三つ葉に金糸(S 撚)片駒の仕分縁取。

唐花小 花弁 - 刺し繻 4 ~ 5 段。外から暈縹風に刺す。芯 - 棧俵繻風の上に菊繻風で飾るように繻う。金糸(S 撚)片駒の仕分縁取。

葉 各唐花大には葉がそえられるが、それらはほぼ同様の施工になる。刺し繻 5 段。当初、金・銀の片駒仕分縁取りがすべての葉に見られたと考えられるが、現在は一部に見られる。金糸は S 撚。銀糸は太く Z 撚。

元葉 この一叢の団花の最も元になると見られる茎と、そこから左右に一葉づつがあらわされる。団花のほぼ中央下部に配されている。茎 - 金駒繻。金糸(Z 撚)と綴じ糸(Z 撚)は金糸 3 本を 1 本でとじる。葉 - 刺し繻。外 5 段、内 3 段。金糸(Z 撚)仕分縁取。

【部位 3】鳥の銜える花枝 一枝の花枝を鳥が銜えている。《繻糸》平糸《繻技》各種

花 同心円状に二重にあらわされて、一花とする。刺し繻。外 6 弁花 - 4 ~ 5 段、弁脈は纏い繻。中 5 弁花 - 3 段。芯 - 棧俵繻風にまとめる。金糸(S 撚)片駒仕分縁取。

蕾 刺し繻 4 段。金糸(S 撚)片駒仕分縁取。茎 - 刺し繻。両縁に撚糸(Z 撚)をそわせる。



挿図53 花喰鳥文刺繡残欠(南倉185 - 128号櫃 - 雑31) 部位4

葉 各葉ともに外・内二重の構成で一葉とする。葉脈のあるものとないものがある。外 - 刺し繡3～4段。内 - 刺し繡2～3段。三葉にあらわされている。各々、金糸(S撚)片駒仕分縁取がある。葉脈 - 纏い繡。墨下絵が見られる。

茎 まつい繡。両縁に撚糸(Z撚)をそえて綴じている。

【部位4】散花 虚空に散花を一枝つつあらわす。その他、すでに欠失によって葉だけになったものもある。

《繡糸》平糸《繡技》各種(挿図53)

花 花弁 - 刺し繡4段。銀糸(S撚)による片駒仕分で縁取を施したのものもある。中心に芥子繡ふうの施工のあるものがある。萼 - 平繡・刺し繡。

花房 刺し繡。外4段・内3段。金糸(S撚)による片駒仕分縁取。

蕾 花弁 - 刺し繡4段。墨下絵が見える。萼 - 刺し繡1段。

葉 刺し繡3段。金糸(S撚)による片駒仕分縁取のあるものがある。

茎 纏い繡。

【部位5】蝶 二匹の蝶(A・B)が散花とともに虚空に舞っている。《繡糸》平糸《繡技》各種

A 胴 刺し繡。目の表現がある。羽 刺し繡6段。上に芥子繡を施す。触角 纏い繡。

頭先に冠毛がある。足 継ぎ針繡。

B 胴 刺し繡。羽 刺し繡4段。上に芥子繡を施す。触角 纏い繡。焦茶。



挿図54 花鳥文刺繡紫綾幡類残欠(南倉185 - 130号櫃 - 雑52) 部位3

16 花鳥文刺繡紫綾幡残欠（南倉185 第130号櫃 雑第52号）（全姿図16）

【概要】繡幡の残闕。坪に花喰鳥と花枝で構成された繡文様の一部で、当初の華麗をしのばせる。下地の裂地はほとんど欠失し、ようやく刺繡文様で保たれている。両面刺繡による。先に全体的な注目点をまとめておこう。

- 1、孔雀文刺繡（調査品目9）と一連の作と考えられることがあった。しかし、当残片の刺繡はさらに優れていて、当然別手によるとされよう。例えば翻る大きな葉の表現などにそれが指摘できる。
- 2、鎖繡の乱れなどから、現状の表面が、刺繡の表面であることが知られる。
- 3、動的な部分には刺し繡を、静的な表現には平繡を用いるなどの配慮がうかがえる。
- 4、下絵は見られない。



挿図55 花鳥文刺繡紫綾幡類残欠
（南倉185 - 130号櫃 - 雑52）部位4

【繡文】花鳥【下地裂】紫綾

【部位1】花喰鳥 《繡糸》平糸《繡技》両面刺繡（口絵25）

頭 刺し繡3段。針目細かい。

飾羽 刺し繡2段。

目 点繡。青。

嘴 刺し繡。

翼 雨覆羽1 - 刺し繡。濃緑2・淡緑2の繰り返し。きわめて細かな針目。雨覆羽2 - 刺し繡。黄2・淡緑2の繰り返し。風切羽 - 刺し繡。外から黄3・淡緑2・黄3・淡緑1・黄3・淡緑2・黄1と重ねる。脇羽 - 刺し繡。黄と緑を2～3など繰り返す。

胸から腹 - 刺し繡。4段から5段・8段へ次第に幅広くなり刺数が増す。紫から白茶。

尾 - 刺し繡。青2・黄3・4へと次第に幅広くなり刺数を増す。

腿 - 刺し繡。

脚 - 鎖繡。2筋

【部位2】花喰鳥の台座となる花 《繡糸》平糸《繡技》両面刺繡

花卉 刺し繡4段。花芯 - 刺し繡。細かな刺し。花粉 - 芥子繡。花芯と同系色系。

萼 刺し繡2段。茎 刺し繡。

【部位3】花 幡面の花や蕾はいずれも特色がありそれぞれ別記する。

《繡糸》平糸《繡技》両面刺繡

二葉をそえた蕾様のもの 花弁なく、すぐ花芯を大きくあらわす。

花芯 - 刺し繻 6 段。花粉 - 芥子繻。花芯の上に繻う。花芯と同系色。蕊 - 鎖繻。葉 - 刺し繻。葉脈 - 刺し繻

豊かな蕊をあらわしたもの（挿図54）

花弁 - 刺し繻 5 段。花芯 - 刺し繻。花粉 - 芥子繻。上に 3 針、下に 2 針。蕊 - 鎖繻。萼 - 刺し繻 5 段。

上方に立ち上がった側面花

花弁 - 刺し繻 4 段。花芯 - 刺し繻 5 段。花粉 - 芥子繻。花芯の上に繻う。萼 - 刺し繻。茎 - まつい繻。

蕾 刺し繻 4 段。上に芥子繻を突く。萼 - 刺し繻 2 段。

【部位 4】葉 《繻糸》平糸《繻技》両面刺繻（挿図55）

表面 - 刺し繻 7 段。裏面 - 刺し繻 4 段。葉脈 - 鎖繻。

【部位 5】蔓先 鳥の下方にあたかも流雲のように見える先端に巻きこみのある蔓先二条。

《繻糸》平糸《繻技》両面刺繻

渦 刺し繻 4 段。

流れ 刺し繻。糸刺しの方向をかえて、光沢の変化する抜群の効果をしめす。

付記

平成十二、十三年の兩年度にわたる正倉院宝物 刺繻調査は福田喜重、澤田むつ代、河上繁樹の各氏と切畑健が担当した。この報告書執筆にあたっては、澤田、河上氏はそれぞれの主題のもとに、正倉院宝物における刺繻の独自の特色について論考し、技法を中心としたきわめて具体的な調査報告は、福田氏の見解をもとに切畑が記述した。なお、この調査においては、終始、福田氏による実技に裏付けられた観察や解明が、特に重要であったことを付記する。

（大手前大学人文科学部教授）